Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-04

私の教師生活７

川地，亜弥子
小宮山，繁
石本，日和子

(Citation)
私の教師生活７――戦後教育実践に学ぶ――（2023年度日本教育学会近畿地区研究集会記録）

(Issue Date)
2024-07-28

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490423

私 の 教 師 生 活 7

――戦後教育実践に学ぶ――

日本教育学会近畿地区

――2023 年度――

はしがき

川地亜弥子（神戸大学）

この冊子は、日本教育学会の近畿地区が 2023 年度に行った活動の記録の一部である。

近畿地区では、京都・大阪・神戸の３地区で企画を分担し、その研究活動を担った。2023 年度は、神戸企画として渡部昭男理事とも相談しながら、年度担当者として川地が３つの研究集会を企画した。そのうちの 2 件が、「私の教師生活――戦後教育実践に学ぶ」である。これは、2006 年に田中耕治元理事（現佛教大学教授・京都大学名誉教授）が始めた企画を、船寄俊雄元理事（現大阪信愛大学副学長・神戸大学名誉教授）が教師の自己形成過程に力点を置いて継承し、さらに 2023 年度の企画として、教育実践の報告を中心として継承したものである。本冊子では、以下の企画の講演部分を中心に収録している。

①　私の教師生活――京都の綴方教師として

講　演　者：小宮山繁氏

(元京都市小学校教諭。日本作文の会元副委員長、近畿作文の会元会長、京都綴方の会元会長、京都市つづり方の会元事務局長等)

日　　時：2023 年 4 月 23 日(日) 14:00-16:50

場　　所：京都大学教育学部第１講義室・オンライン併用

京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センターE.FORUM との共催とし、西岡加名恵理事に多大なお力添えを頂いた。対面参加者には『小宮山繁学級　子ども詩集　おとうさんのかおしてはったもん』（デザイン ぴかっそ工房）が配布された。

②　私の教師生活――子どもを寿(ことほ)ぐ教育学　ログとガチャをこえて

講　演　者：石本日和子氏

(相愛大学講師。元兵庫県小学校教諭。教育科学研究会副委員長等)

日　　時：2023 年 5 月 27 日(土)14:00-16:50

場　　所：神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 A427 室

日本教育学会からは会の運営に財政的支援を受けた。記して感謝する。また、会の運営には、若き研究者が文字通り尽力してくれた。全員の名前を挙げることはできないが、とりわけ、京都大学大学院岡村亮佑氏、神戸大学大学院植田涼香氏、友永達也氏は、様々な困難の中、献身的に開催を支えてくれた。この場を借りてお礼申し上げる。パンデミックを乗り越えて、日本の教育実践について実践者自身の語りを通じて深めるという時間を、若い研究者と共有できたことは忘れがたい経験となった。

最後に、小宮山繁氏、石本日和子氏には、当日の講演にご尽力頂いただけでなく、本冊子作成のためにも何度もお力添え頂いた。心より感謝申し上げます。

目次

はしがき　i

小宮山繁　私の教師生活――京都の綴方教師として

　講演記録　1

　講演ポスター　45

石本日和子　私の教師生活――子どもを寿(ことほ)ぐ教育学　ログとガチャをこえて

　講演記録　47

　講演ポスター　70

私の教師生活――京都の綴方教師として

講　演　者：小宮山 繁 氏

(元京都市小学校教諭。日本作文の会元副委員長、

近畿作文の会元会長、京都綴方の会元会長、京都市つ

づり方の会元事務局長等)

日　　時：2023 年 4 月 23 日(日)14:00-16:50

場　　所：京都大学教育学部第１講義室・オンライン併用

（川地）　それでは、定刻になりましたので、ただ今より、日本教育学会近畿地区、京都大学の E.FORUM との共催による研究集会を開始します。司会を務めさせていただきます神戸大学准教授の川地亜弥子と申します。よろしくお願いします。

事前に申し込まれた方だけで 86 人の参加ということで、たくさんの人にお集まりいただけて、とてもうれしく思っております。お礼申し上げます。

本日は、「私の教師生活―京都の綴方教師として―」と題しまして、小宮山繁さんにたっぷりお話しいただきます。よろしくお願いします。

最初に、簡単に講師の小宮山繁さんについてご紹介させてください。小宮山さんは京都市の公立小学校で綴方教師として、子どものすてきな作品とご自身の実践を発信し続けてこられました。そして、生活綴方、作文教育の民間教育研究団体での京都綴方の会、京都市つづり方の会、いわゆる京都の綴方サークルですね。そして、近畿作文の会、日本作文の会で活躍してこられました。私は京都のサークルで小宮山さんと出会い、お話を伺うたびに刺激を受けてきました。私から見た小宮山さんは、いわゆる綴方教師といわれる先生たちは本当に個性豊かな先生方なのですが、その先生方の中でも理論派で、例えば生活綴方と到達度評価、ここ京都の地は到達度評価の中心地でもありましたので、そういうことをお尋ねしたりしても非常に明快なお答えを頂き、ここに京都市つづり方の会が、これなのですが、京都市つづり方の会が手作りでというか、出してきた「綴方ノート」の第 3 集というものがあるのですが、ここの一番下に「生活綴方と到達度評価」、藤原義隆というので、藤原さんの論考が載っており、その 1 個上が「高学年の実践報告」、小宮山繁さんなのですね。到達度評価と綴方というのは全然違うみたいなのですが、例えばどのように京都の中で理解されてきたのかということをお尋ねしても明快なお答えを頂き、それから野名・田宮論争について、それから綴方指導における系統性など、議論になったときにも理論的に、そしてご自身の実践を根拠としながら論じてくださる先生です。

そして、先生の実践はとても面白いです。小宮山さんの授業は、実は日本作文の会が 1990 年に駒草出版から出した『作文教育実践講座』の第 17 巻に、VHS というのは若い方は分かりますか。いわゆるカセットテープです。カセットテープで公刊されています。京大にはないかしもれないのですが、私が勤めている神戸大学の人間科学図書館に来ていただいたら VHS で見られます。小学校 3 年生の詩の授業、詩を読み合う授業が丸ごと見られます。子どもたちの表情がとてもいいのです。これはすごく安心して授業に参加して聴いているなというのが、ビデオなのだけれども分かるというのですか、そういうものになっています。関心のある方はぜひ見ていただきたいと思います。

それから今日の資料、オンラインの方はオンラインのフォルダ、ストレージにアップしていますし、会場ご参加の方は紙で配布しています。その資料にもたっぷり子どもの作品が載っていますし、それから今日、小宮山さんから京大に来られた方にはプレゼントということで、「子ども詩集」を配布させていただいています。理論家として、また実践家として、京都、近畿、日本の綴方を支えてきた小宮山さんのお話を、子どものすてきな作品とともにたっぷり 2 時間お伺いしたいと思います。途中で 10 分休憩を挟んでお話ししていただきます。その後、30 分ほど質疑応答の時間を設けます。最後に、本企画担当のお一人である渡部昭男教授より閉会のあいさつを申し上げます。

それでは、小宮山さん、どうぞよろしくお願いいたします。

「私の教師生活—京都の綴方教師として—」　講演者　小宮山　繁

こんにちは。私は 1949 年生まれですので、いわゆる団塊の世代です。京都教育大学を卒業した後に教師になりまして、37 年間、京都市内の学校 7 校で教壇に立ちました。その後、小学校 1 年生の「学びのパートナー」という非常勤講師、常勤講師かな、のお仕事で 5 年間勤めて、その後、ちょっと重なるのですが滋賀県にある滋賀医療技術専門学校というところで、国語の担当で学生さんを教えました。これもまた楽しかった。一番最後のところで話に出てくる学校なのですけれども、小学生もいろいろ書いて楽しいのだけど学生の人たちが書いてくれるものも大変楽しく有意義で、教師生活を終えることができたと思っています。

私は、先ほども紹介していただいたのですが「京都市つづり方の会」と、「京都綴方の会」で主に勉強させていただきました。今日はこういう、自分の教師生活を振り返るという機会を与えていただいて、大変うれしく思っております。この詩集（『子ども文詩集』）も、何かの形で自分のしたことが残せたらうれしいなと思っていたのがこういう詩集になりまして、大変喜んでおります。

ご存知のとおり、生活綴方というのは長い歴史のある日本独自の教育方法でありまして、子ども観や教育思想などをいっぱい含んだ大変素晴らしい教育実践です。先輩の方たちが創造され、それをわれわれが引き継ぎ、さらに次へつないでいく使命があるのではないかと思っております。今日は Zoom の方の参加者の中に、日本作文の会の関連の方と各地域で活躍しておられる方もおられるので、みんなで一緒にやっていきましょう、みんなで力を合わせて生活綴方教育運動を進めていきましょうというメッセージを込めて、お話ができたらいいなと思っております。

では、使命感でお前はやったのかと言われそうですが、そうではないです。私が綴方の仕事を続けられたのは、とにかく子どもに作文や詩を書いてもらったり、読み合ったりする仕事が面白かった、楽しかったということが一番だと思っています。

それから二つ目には、子どもと書いたり読み合ったりすることによって、子ども同士がつながり合うのが実感できました。仲間として意識したり、つらいことがあったらそのつらいことを共有して一緒に頑張っていこうということを思ってくれるようになりました。それが実感できたということが大きいのではないかなと思います。

もちろん子どもが書くことによって賢くなっていくということはあるのですが、「ああ、今日はあれを書いたから賢くなった」とか、そんなことは思わないのです。でも、みんなで読み合っているときに、心を寄せていろいろなことをしゃべってくれて、「ああ、子どもがつながっているな」と実感できました。これが二つ目の理由です。

三つ目には、例えば私のやったことをサークルの中で話したりすると、「いや、それはこうとちがうか」ということを言ってもらえたり、「いや、ええ仕事してるね」と言って褒めてもらえました。自分が認められ、一緒の土台で考えてくれる仲間がいたということが大きいと思います。サークルを通じて、教師の中に自分の同志を見つけることができたと思います。それが、京都の中だけではなくて近畿の中にもおられたし、日本全体の中に広がっていって学ぶことができた。この三つが大きく自分が生活綴方にこだわった理由ではないかなと考えております。

この詩集の一番後ろのところに、あとがきがございます。ちょっと見ていただければと思います。このあとがきに、「もしも」という詩があります。

もしも　　竹中　郁

もしも　この地球の上に
こどもがいなかったら
おとなばかりで
としよりばかりで
おとなはみんなむっつりとなり
としよりはみんな泣き顔となり
地球はすっかり色をうしない
つまらぬ土くれとなるでしょう

こどもははとです。
こどもはアコーデオンです
こどもは金のゆびわです

とびます　歌います　光ります
いきいきとさせて
こどもは
とびます　歌います　光ります
（竹中郁『竹中郁少年詩集　子ども闘牛士』理論社、1984 年、pp.8-9）

竹中郁さんは詩人で、戦後、児童詩誌「きりん」を創刊され、編集されました。投稿された作品を雑誌にされるわけですが、その投稿者の中に灰谷健次郎さんがおられました。その灰谷健次郎さんと同じように投稿しておられた、岡本博文さんという方がおられました。その岡本博文さんという方が、京都綴方の会の立ち上げのときには大変大きな役割を果たされました。事務局長をしながら会を運営されました。この岡本博文さんの影響があって、私は児童詩を始めました。『児童詩教育と学級経営』という本があります。その中に出てくる「のぐちてるお」という子どもの取り組みなどは、もう涙なしには読むことができなかった記憶がございます。岡本先生に付いて児童詩をやっていこうというふうに私は思いました。そのとき同時に、仲間の中にもその影響を受けた青笹哲夫という人がいたり、あるいは西条昭男という人がいたりして、その方たちと一緒に勉強することによって、自分がやりたい仕事の方向みたいなものが見えてきたのではないかと思っております。私が教師になった年と、京都市つづり方の会、京都綴方の会が発足した年が同じなのです。そのちょうど京都で生活綴方教育運動が盛り上がっているときに僕が教師になって、サークルに参加したということです。

第１章　子どもはとびます　歌います　光ります

　では最初に、資料の 2 ページを開けてください。「子どもは　とびます　歌います　光ります」という題を付けたのが、第 1 章です。子どもの表現は面白い、楽しい、時にありがたいと思うときがございます。どんな作品を自分がそう思っているかを話します。

　　せんせいへ　　一年　ゆたか

こみやませんせい
あかちゃんがうまれはって
おめでとうございます
ぼくかぜひいてやすんでいたけど
なんだかそんなきがした
だってがっこうにいって
せんせいのかおみたら
おとうさんのかお
してはったもん

　うれしかったですね。これはこういう紙に、画用紙だったかな、裏に 1 文字ずつ色を変えて書いてくれました。「せ」は赤とか、「ん」はブルーとかというふうに色を変えて書いて、「せんせい」と言って持ってきてくれたのです。昨日、自分は休んでいて小宮山先生に赤ちゃん生まれたという話は聞いていないのだけど、次の次の日かな、に持ってきてくれたのです。「おおきに」と言ってもらったのですけれども、何か涙が出そうになるほどうれしかったことを覚えています。これはちょうど僕が教師になって 5 年目です。これを読むと、あのとき息子が生まれたということでいろいろなことを思い出します。
　次は、「むかで」という詩です。

　　むかで　　四年　かずゆき

「あ、むかで」
とぼくがいった
むかではきにせずあるいていった
（それはむかでは気にしないですよね。これはそういうふうにこの子は思ったのです。気にしないと）。
ぼくがちょっとさわった
むかでがくるりとからだをまげはった
（敬語表現なのです。まげはった。）
ぼくがわらった
むかでがあるきだした
ぼくはむかでをつけた

そしたらすにかえった
ぼくは思った
おしいことをしてしまったなあと思った
なぜかというと
足をかぞえるのを
すっかりわすれたからです

私はこれを読みながら思ったのですけれども、この子はむかでと共生しているなと。私らはむかでは嫌ですけれども、この子は共に生きていると感じたのです。こういう感性を持っているというのが、ああ、これが子どもなのかなという気がしました。このユーモアのあるオチですね。これはわざとではなくて自然に出ているのです。笑わせてやろうとかと思っているわけではなくて、この子が本当に忘れたと思ったということを書いているところが子どもの表現の楽しさであり、値打ちなのかなと思います。

魚になりたいこと　　三年　みきや

「ぼくは、魚になりたい」
といった
「だってすいすい泳げるもん」
とお母さんにいったら
「もっと大きなゆめをもちなさい」
とゆわれてしまった
大きなゆめて
いったいなんだろう
お金持ちになることかな
えらい発明することかな
りっぱな人になることかな
ぼくは大人になったら
なにになっているのかな

これはお母さんの気持ちも分かりますね。「魚になりたい」と言われたら、「もうちょっと大きな夢を持ちなさい」と言うでしょうね。でも、大きな夢って何でしょうね。お母さんに言われて、「いや、それはこうや」と子どもも言えないだろうし、お母さんも「大きな夢って何や」と言われたら詰まられると思うのですね。この子の書いていることで面白いのは、「お金持ちになることかな」とか、次に「えらい発明する」と書いている。これは世間的、一般的に言うとすごく認められることです。でも、この子はその範疇ではない「りっぱな人」と書いている。お金持ちとか偉い発明ではない何かで立派な人と書いている。この子の考えている立派な人というのは、ひょっとしたら何か私らが思っているのと違うことかもしれないですね。「ぼくは大人になったらなにになっているのかな」、本当に何になっているか知りたい。この子は散髪屋さんの子どもでしたけれども、今も散髪屋さんを

しているのだろうか、どうなのだろうかと思います。大人にもなかなか答えが出せないようなことを子どもらが考えているということが楽しい。

こんどのりょこうカニカニ　　一年　りつき

こんどのれんきゅうの土日に
りょこうにいくのだカニカニ
おんせんもあるのだ
こんどもカニカニ
カニのふるコースだカニカニカニ
カニになってかえってくるぞカニ
たのしみだカニ
カニカニカニカニカニ

まあこれだけ旅行に行くことを楽しんでくれたら親も連れていきがいがありますよね。これはカニカニというのを続けることによって自分の言いたいことが言えるというこのリズム感、詩にしているところがすごいなと。

きょうとう先生　　二年　としよし

ぼくはふしぎです
大阪の学校にもきょうとう先生がいます
東京の学校にもきょうとう先生がいます
なんで大阪先生や東京先生は
いいひんのかな
日本のどこの学校でも
みんなきょうとう先生かな
ぼくはそれが一ばんふしぎです

これは何か分かりますか。京都だからきょうとう先生だと思っているのです、この子は。長音とか拗長音とかを習ったら、その分類ができたらきっと分かるのでしょうけれども、この子はそう思い込んでいますから、単なる勘違いなのですけれども、学ぶことで失ってしまうような楽しさみたいなものがあるのかなと。子ども世界だけにある何か勘違いの面白さみたいなものがあるかなと思います。

7 月 26 日　　一年　たかゆき

せんせいあのね
きょううえもりくんのいえで
しゃぼんだまをしました

おっきいしゃぼんだまと
ちいさいしゃぼんだまをつくりました
とってもたのしかったよ
しゃぼんだまはすってはだめです
ふうっとふきましょう

　これは題がおかしいでしょう、7 月 26 日って。これは夏休みの宿題で書いたのです。本当は「しゃぼんだま」とか何とかという題にしたらいいのにね。でも「7 月 26 日」と書いているところが面白いなと思いました。この子は絶対に吸ったことがありますね。これは書く前に吸ったかもしれん。「しゃぼんだまはすってはだめです。ふうっとふきましょう」と偉そうに言っているけれども、きっと失敗したことがあってこれを書いている。それが透けて見えるようで面白いのですね、大人は。

　　いもうと　　一年　あい

せんせい
いもうとが
あめのどつめたし
おかあさんが
「ゆびつっこみ。」
いわはった
そしたらいもうとが
はなのあなに
ゆびつっこんでん

　これは読む僕が、きっとこういう話が好きだろうと思っているのですね。これを書いたら先生にウケるというか、先生はそういう人だというのが分かっていてこういうのを取材しているのだと思います。これは僕より上手ですね。

　　ふるたくんのひみつ　　一年　えいと

しってた？
ふるたくんって
ゆみちゃんがすきなんやで
まえ、ふるたくんがゆってた
まえはみかちゃんとケーシーちゃんが
すきってゆったはった
でもいまは
ケーシーちゃんがきらいで
みかちゃんはふつうらしいよ

で、ゆみちゃんがすきなんや
きょうれつにこわいとこと
やさしいとこが
すきなんやて

　男の子って、こういう活発でぱんぱんぱんと言ってきたりする女の子が好きですよね。これは男の心理を突いていますね。ケーシーちゃんって面白いでしょう。入学式の次の日に教室へ入っていったら、外国人の、アメリカ人の男の人が後ろにいるのです。「どなたですか」と言ったら、「いや、今日から入れてもらいます。うちの娘が入りますのでよろしく」と言われたのです。ケーシーちゃんという女の子で、僕は何も話を聞いていないから「えーっ？」と言ってしまったのですが、日本へ今ちょうど帰ってきていて、学校に行かないのも何だから、2 週間か 3 週間ちょっとあんたところのクラスに入れてくれないかというので、校長先生が「ええよ」と言われたみたいで、僕のクラスに入ることになったのです。それで、「ああ、そうですか」と言って、その男の人は 3 日ほど教室に通われましたね。しかも、いつもニコニコ笑いながら後ろにいるのです。別に私の妨害をしようとされるわけではないから「どうぞ」と言って。そしたら何かえらい気に入ってくださったみたいで、この子は 1 年半いたのです。そのケーシーちゃんというのは白人の方とのハーフで、お母さんはここの地域の方なのです。べっぴんで、よく金髪のお人形さんがあるでしょう。それに本当にそっくりで、かわいい女の子なのです。みんなケーシーちゃんが好きなのです。ところが、だんだん付き合っているうちに、ケーシーちゃんはなかなかの子で、意地悪だとかいろいろと言い出してケーシーちゃんは人気がなくなってくるのですけれども、これはその頃の詩です。

　このえいと君も、先生はこういう話が好きだというのが分かっていて、これを僕に伝えようとしている。子どもというのは以心伝心、北原白秋が「童心主義」というふうによくいわれるのですけれども、それと同じようなことを感じさせてくれるものがあるなと思っています。子どもの隠し事というのは面白いなと私は思っていまして、隠さなくてもいいのになと思ったりもするのですが、その中に何か見えてくるものがあると思います。

かんじテスト　　三年　まなぶ

はやくかえって　かくそ
今日は　かんじテスト二十点やったから
家にかえってすぐにかくしました
お母さんが
「かんじテストみせて」
といいました。
ぼくは　きのうの漢字テストみせてなかったから
きのうのをみせたら
おこりませんでした
そのテストは

こんどは
したじき二まいの間に入れています

正直に言うのですね（笑）。これが本当に子どもの素直なところなのだなと思います。
次のやつは、ちょっとえーっと思ったのですが、ちょうど 2 年生から 3 年生になるときに私が学校を替わるというのでお手紙でくれたものです。

小宮山先生へ　　二年　かな

先生はちがうがっこうでまたおしえるから、わたしはいやです。なぜかというと、この石田小でいちばんわたしはやさしい先生とおもいました。おわりの会でシェーハーのかみさまをしたり、土ようびはしゅくだいなしで、中かんやすみは、先生とおはなししたりしました。わたしは先生ととったしゃしんと、ともだちととったしゃしんをみて、わたしは、はんなきをしました。
わたしの目は大きいです。おかあさんはわたしのチャームポイントは目だといっています。（何でこんなところに出てくるのでしょうね、これ。そこへ話が飛ぶのですね。）わたしはたしかになきむしです。いつもおじいちゃんのいえにいったらおじいちゃんになかされます。でも、もうさんねんせいだからあんまりなきません。
そしてわたしはわるいことをしてしまったんです。それは 2 つあります。1 つはくすのきのきいろいじしゃくをぬすんで、もう 1 つは大つきさんとゆはらくんと大がきくんと 4 人であそんでいて、6 とうからいしをなげていて、大がきくんがくるまのガラスをわりました。（えらいこっちゃ（笑）。）わたしはもうはんせいしています。
またおへんじください。まっています。
こみやましげる先生へ　　かなより

これはどうしようかと思ったのですけれども、話がややこしくなるので私は無視することにしました。言わなければばれないのに、これは私がもういなくなるから言っておかなくてはいけないと思ってくれたのですね。手紙を書きながらこの子はざんげをしているわけですから、いい時間を過ごしたのかなと思ったりしています。この大つきさんとか、ゆはら君とか、大がき君というのは、みんな私のクラスでした。ちょっとこれは困ったなと思うのですが、まあこんなこともあるかと思うことにしました。
高樹のぶ子さんという小説家の方が、こんなエッセイを書いておられます。高樹さんは小学校 6 年生の頃、毎日日記をつけて担任の先生に読んでもらっていたらしいです。
「日記帳の表題は『乱心』だった」。高樹さんはうそも書いた記憶があると。「こう書けばこんな反応が返ってくるだろう、先生はどんな感想を持つだろうと想像しながら書いた記憶がある。だからこそ、返された日記帳を読む愉しみが大きかったのだし、あるときは思うつぼの一文などに触れてニヤニヤしたこともあったはずだ。あの頃の先生は私の『乱心』の中のうそと実にどの程度気付いていらしたのだろう。うそが事実以上に人の心を動かすことに私が気付いていたとしたら、先生は私が生まれて初めて出会った読者ということになる」。

赤ペンを書く。またそれを読んでまた書く。その繰り返しなわけですけれども、その中にある先生と子どものやりとりの妙技､その辺がこの綴方の仕事の醍醐味かなと思います。

第 2 章　地域に根ざす綴方教育①

第 2 章にいきます。先ほど川地先生が本を紹介してくださいましたが､「地域に根ざす生活綴方教育」という本です。この当時の京都綴方の会、特に府下の方たちは、地域に根ざす生活綴方運動を進めていこうということを強調されました。丹後地域の方は、夏になると民宿が収入の大半なのです。そうすると民宿をやるために、自分が使っている部屋を民宿のために使われるから自分の部屋でなくなるというようなことを子どもが書いていて、なかなか大変だなと。にぎやかになったり、はやったりするのはいいのだけど、子どもの生活はくちゃくちゃになってくるのだなという話が出ておりました。

丹波の美山町では中村恵子さんがおられて、その先生は、その地域にあるお墓を中学校の生徒さんと回って、その地域からどれくらいの方が戦地に出て亡くなっておられるかという調査をされるなど、その地域の中で課題になるようなことを見つけながら、しっかりした文章を書かせるというようなことをしておられました。この仕事に大変僕らも刺激を受けました。西條昭男さんは西陣の地域で、京都西陣はたのうたの実践をしておられました。自分のおじいちゃん、おばあちゃん、お母さんが作った織物をとても誇りに思っていることが詩に表現されていました。地域に根ざすというのはこういうことなのだなと思いました。

が､「が」です。私の勤めている学校には西陣はないし、清水焼もないし、三大祭りもないし、別に特に地域を強調するような産業があるわけでもない、伝統的な何かがあるわけでもない。私は何をしたら地域に根ざす実践になるのだろうというのがさっぱり分かりませんでした。でも、何か地域に根ざすということを自分の中で考えなくてはいけないなと思ってやっていたのが詩集の 27 ページの「私の育った街」というもので、取材してきて詩に書こうかといってやっていたのです。七条商店街というのが中央市場からずっと続いておりまして、ものすごく人気が高かったのです。そこで育った自分というのを詩にしようということで取り組んでおりました。学芸会でも七条商店街の商店街に出て、自分の生い立ちみたいなものを脚本に入れて劇を作って上演したり、これも西條さんが西陣はたのうたでやっていたのをまねたのですけれども､そんなことを結構やりました｡｢魚屋のおっちゃん」とか、その次の「声が飛ぶ中央市場」とか、こういう詩を書かせて、これが地域に根ざすなのかなと、自分では思っていたのです。でも、もう一つ自分の中ではすっきりしないのです。一つこの資料に載せた「七条通を通る市電」というのをちょっと読みます。山本絵里ちゃんという子の詩です。

七条通を通る市電　　六年　えり

ガヤガヤガヤ
「へーらっしゃい。」
「安いで、安いで。」

「ほんまにこのプリンセスメロン
　　おいしいかあー。」
「そら、おいしいでーっ。
　　こーていなあ。」
ガヤガヤガヤ
七条通りを　通る市電が
交差点で　とまっている
買い物をする
楽しそうな声が　はねかえる

市電がはいしされた所もある
しかし七条の市電は
ゴートンゴートン
と　つかれたように
力をふりしぼって　走る走る

赤、オレンジ、黄
いろいろな色が
パレットの中で　混ぜられた
絵具のような　夕日の中へ
市電も
とけこんで　いった

取材させてこういう詩を書かせていたのです。こういうふうに書いてきてくれて、ああ、これが地域に根ざすかなというようなことを思っていました。これは僕が一番最初に赴任した学校なのです。教師になって 6 年目ぐらいでした。それくらいのときの詩です。

でも、先ほど言ったようなような丹後の実践とか、美山の実践とか、南山城の実践は、ちょっと私のやっているものとは違うのです。僕のは表面つらなのですよ。そこで生きて、根ざして、働いておられるような、そういうものとは違うなと、自分で思っていたのです。岡本先生という先ほどの児童詩の先生に、「岡本先生、地域に根ざすってどういう実践なのですかね」と聞いたら、「それを言う前に、まずひとり一人に根ざさなあかんよ」と。ひとり一人に根ざすということを詰めていった方がいいのではないかということをおっしゃって、ああ、その方が僕もイメージしやすいなということを思いました。

第 3 章　ひとり一人に根ざす綴方教育①

①先生、T 君は悲しすぎて書けへんねん

これから第 3 章の「ひとり一人に根ざす綴方教育」という話をさせていただきます。「お母ちゃん」という T 君という子の詩です。

お母ちゃん　　三年　Y・T

おかあちゃんは
びょういんで
いまにゅういんしたはる
お父ちゃんは　びょういんでのお金を
ださなあかんし
お父ちゃんのお金がへる
おかあちゃん
しんどいんか
ぼくが
四年生になるまでには
かえってくるやろ
はよかえってきて

T 君は私の二つ目の赴任校だった西京極小学校というところで最初に教えた子どもで、3 年、4 年を担任しました。この子のお母さんは 2 年生の頃から入院生活をしておられました。お父さんは働きながらお母さんの面倒を見、子どもらの面倒を見ておられました。無菌状態を保たなければいけないから、この子は会いにいけなかったのですね。それで、この子はいとこの家から通う、妹は他の親戚のおうちに預かってもらうというような生活でした。

この子がいとこの家に、いとこというのは何人もいますから、鳥取の方にもいとこがいて、そこに帰ったときの日記です。

いとこの家にいく間　　三年　Y・T

お父さんがお母さんのところへおみまいにいっています。だからお父さんは　ぼくといっしょに行けません。でも、ぼくは鳥取のおばあちゃんのところにいくとき、一人できしゃにのっていきます。タクシーも　一人でのれます。バスにのったとき、せいりけんをとって、すわろうとしたとき、すわるせきがありません。しかたなくどこかのぼうを　しっかりにぎっていました。

この「どこかのぼうをしっかりにぎっていました」というこれに、この子が一人で一生懸命帰っている姿が目に浮かびます。頑張っているのだなと、つらいことはあるのだけれどもこの子は気張っているなということが分かります。

お母さんがたいいんしたこと　　三年　Y・T

ぼくは　きょう学童をやすみました。なぜかというと　お母さんが　びょういんからたいいんしてきたからです。ぼくが学校から帰ってきたら　お母さんがいません。

パーマやさんに　いっていたからです。おかあさんがパーマやさんからかえってきたら

まゆみが草津にいっているので　むかえにいきました。

これには希望がありますね。よかったねという。お母さんは、9 月にもう一度退院されて、すぐに入院されて、12 月の 30 日に他界されました。T 君は、冬休みに入ってからすぐ鳥取へ帰っていたので、お母さんの臨終の場に立ち会えませんでした。お父さんに聞きましたけれども、お母さんが亡くなったことを聞いた T 君は、「うそ！」と言い、1 時間泣き続けたそうです。

1 月 21 日の日記にこんなことが書いてありました。

家のこと　　三年　Y・T

家には　ぼくとおとうさんしかいません。まゆみはお父さんのあねの家にいるので、一日もはやくかえるようにしたいです。ぼくも　お父さんも　さびしいです。

ぼくが、学童からかえると　お父さんが、ごはんのよういをしています。お父さんが　めだまやきをつくると　お父さんが　うらがえしたのでつぶれた。めだまやきをたべるとあまりあじはふつうとかわりません。

ぼくのようじは　買いものと　大こんおろしと　ほとけさんの水をかえることです。

朝七時三〇分に　お父さんといっしょに　外へ出ます。

なかなか　カギを　ぼくに　あずけてくれません。

これからはお父さんに　ゆわれるように　せいりせいとん、とじまりが　きちんとできるようになって　一日も早く　ぼくに　カギをあずけてもらえるように　がんばります。

この日記を文集にして読み合いました。「T 君さみしいやろな」「T 君がんばってる」「T 君、お父さん出張しはらへんか。しはったら大変やと思った」「T 君えらいな」「T 君もえらいけどお父さんもえらい」「うちのお父さんなんかカップヌードルしかようつくらあらへん」などの感想が出ました。

その後、この T 君はお母さんが亡くなられたことを書きませんでした。この 1 年間で一番心に残ったことを書きましょうと言って書いたときも、この子は夏休みかな、鳥取にいて海へ行ったことを書きました。僕は横でずっと見ていて、ああ、違うことを書いているわと。違うことというのは、僕はお母さんが亡くなったことをきっと書くと思っていたのです。それで「お母さんのことを書くのかと思ったけど、違うねんな」と聞いたのです。そしたら T 君は「難しいねん」と言ったのです。それで僕が「ふーん」と、何か分かったような分からないような返事をしたら、横に H 君という子がいたのですが、この H 君という子が、「ちがうねん、先生な、H 君は悲しすぎてな、つらいねん。それで書けへんねん」。

私は参りました。お母さんが亡くなったということを書いたら、それで何かすっとして一段階前に進むのではないかと勝手に思っていたのです。でもこの子は、その前のものを読んでもそうだけど、前に進んでいるではないですか。一生懸命一人で帰って、一生懸命頑張っている子に、僕はつらいことを思い出させて書かせようとしている。それを横で聞いていた友達が気がついて、「先生、ちがうねん」と言ったのです。

よほど私より偉いと思いました。大体、今だから思うのかもしれませんね。その当時は

自分が間違っているとは思わなかったし、書いた方がいいのではないかなとを思っていました。でも、これが引っ掛かるのです。私はそのとき謝らなかったなと。「つらいことさせたな」と言って謝った方がよかったと。

②私はみんなに言う

いろいろなご家庭があって、それぞれの事情があって、家族のことで心を痛めていることがあるのだということで、これから K さんという女の子の話をします。詩集の 41 ページを開けていただけますか。「私はみんなに言う」というところで、三つ続けてこの子の詩が続きます。「けんか」は夫婦けんかしておられる場面です。それから「お母ちゃんの顔」というお母ちゃんのことを見つめた詩。そして「お母ちゃんと私」。ちょっと読みますね。

お母ちゃんと私　　六年　K

「あんな
中路先生も　ようち園の先生も
K が『先生』ていうとき
他の子となんかちがうねんて。
なんかこう
甘えてるような感じやねんて
それで
母親の愛情　たりないのちがうかっていわはったわ。
今は、そんなことないけど」

そういわはんのも　あたりまえ
お母ちゃんは
K の小さいときから
ずーっとはたらきにいったはった
だから、
お母ちゃんが
家にいはる人が
うらやましかった
お母ちゃん
はよ　定年
きたらええのになあ

こういう詩を書いていて、最後に書いたのが「K・T・Y」という詩です。

K という名前の子なのですけれども、「六年　T」と書いてあります。

K・T・Y　　六年　T

「なあ、なんで
K から T になって
Y になんの。」
「いわへん。」
「なんでエ。」
「なんでも。」
いつでもごまかしていた
友だちに聞かれたら
ごまかしていた

私が生まれて
幼稚園に行くまで
K の家にいた
K のお父さんは酒飲みで
机の中に入っている子どものお金まで
とっていってしまう
K のお父さんはカヨがきらいで
お母ちゃんに生むなといった
そして
お母ちゃんは
中絶の注射をした
でも
K は生まれてきた
だから
お母ちゃんに
「生むな言うてんのに
勝手に生みやがって。」
と言った
お母ちゃんは
以前から文句ばかりつけられてきた
もうがまんできなくなったんだろう
りこんした

小学校の時は
二年生ぐらいから
花屋町の方へ行き
今のお父さんとくらしはじめた
一年生の時はおばあちゃんの家でくらしていた

中学生になったら

新しい生活になって
小学校の生活にきりがつくので
Y に変えた
お母ちゃんに
「前のお父さんの顔
覚えてるか。」
と聞かれると
「全然覚えてへん。」
とうそをつく。時々道で見かけたら
わざと遠回りして帰る
あの人に会うと
いやないやな
小さい頃が思い出されてくる

みんなは不思議そうな目で
私に聞くけど
みんなだったら
人に聞かれたら言うか
不思議そうな目で見られるのを
がまんするか
私はがまんできない
私はみんなに言う
それがどういう結果になっても

中学校進学という節目を迎えて、彼女とそのご家族は決断をされて、今現在住んでおられる Y さんという方と再婚して、学校の届けもそのようにきちんと変更されたのですね。これは、K さんにとっては重大事なのです。中学校に行って名前が変わるわけで、そのことをいろいろ何やかんや詮索されて言われるのはかなわないと。じゃあ、私はもうここで宣言するという決意をして、自分のクラスの中でこれを言った。一番の情報源で、「実はあんなんでね、こんなんでね」と言われないようにきっぱりと、本当はこうなのだということを言ったのですね。決意は相当固かったようです。これは自分の生い立ちを詩に書こうと言って、卒業間際に全員で書いたのです。その中で彼女はこれを選んだ。「私はみんなに言う　それがどういう結果になっても」。過去と現在の自分を詩にするということを、彼女は武器にして中学に行こうというふうに決めたということです。

これは、私が教師になって 4 年目です。これをサークルでみんなで話し合ってもらいました。サークルだけではなくて日本作文の会などでも発表させてもらったところ、この詩を読んだ皆さんの関心は、どうやってこの子はここまで赤裸々に書けたのかということで、小宮山はどんな指導をしたからこうなったのかということを聞かれました。私は、「いや、卒業前に生い立ちを詩に書こうと言って、この子はこれを選んで書いた」と言いました。

そして、みんなで読み合ったとき、どんな感想が出たのだということも聞かれましたが、

実は卒業前に順番に全員が、一人ひとり読んだのです。だから、この詩を文集にしてみんなで読むということはなかった。だから、みんな黙って聞いていたのです。全員の分を。そしたら、京都綴方の会で話し合ったときに、松永操長さんという研究部長の方がおられたのですが、こうおっしゃいました。「ここに書かれている事実はあまりにも重過ぎる。小学校６年生の子どもに背負わすにはあまりにも荷が勝ち過ぎている。生まれる以前の父親と母親とのやりとりは子どもには悲し過ぎる。『でも／Ｋは生まれてきた』の『でも』に込められているこの子の想いを、果たして私たち大人は受け止められるのだろうか。私たち大人はこういう詩を子どもたちに書かせてはならない。こういう詩を子どもが書かなくてもいいような世の中をつくっていく義務が私たちにはある」と。

私は、「こういう詩を子どもたちに書かせてはならない」と言われたときに、私が怒られているのだと思いました。でも、いや、そうではない。こういう子どもが出てくる背景と、自分は教師として、大人としてどう向き合うのかという覚悟みたいなものを決めてやらなかったら、綴方の仕事なんかできないぞということを、厳しく指摘しておられたということだと理解しました。この私のいたサークルの先輩は、こういうことを覚悟して臨んでおられるのだなと。自分の生き方みたいなことを問われるのだなということを思いました。

もう一人、銅銀正美さんという先生がおられました。この銅銀先生はなかなか面白い先生でして、何か決まりかけたこともどんとひっくり返されるというと失礼な言い方ですが、僕らが思っていることと違う発想で本質を突かれるのです。このときも、こう言われたのです。「みんなは小宮山さんが良いクラスをつくっているからこの詩が生まれたと言うけど、僕は違うと思う。この詩のすごいところは、教師を乗り越えて自ら進んでいこうとしている詩だからすごいのだと僕は思う。だってそうやん。『友だちに聞かれたら／ごまかしていた』この子が、『不思議そうな目で見られるのを／がまんするか／私はがまんできない／私はみんなに言う／それがどういう結果になっても』って、自立宣言しているのがこの詩やろ。中学校へ行って名前が変わって小学校時代の友達の好奇の目にさらされるのがつらいから、この詩を書いてみんなに知らせたんやろ。これは小宮山さんを信じて書いたとかどうかという問題以前に、子どもが自分の生きる道筋を決めた詩として読む方が正しいと思う」とおっしゃいました。おお、そうかと。子どもは私の行動範囲の中ではない、もっと違う景色を見ながらこの詩を書いているということだと思いました。

このＫさんが、自分の詩日記の表紙に、こう書いていました。

明日
なにがあるかわからない
でも　それは
自分で作るもの
ほうっておけば
悪くなるばかり
明日はなにがある

挑んでいるのです。このように書きながら、一生懸命自分で武装しているのだと思います。つらくて悲しいことがいっぱいあっても、書くことによって自分を励まして生きてい

るのだなと。この子が中学卒業のときに私は手紙を書いて、みんなに書いたのですが、ちょうど任命主任制があった頃で、もう学校の中をくちゃくちゃにするのかというので腹が立って。府庁で座り込みしました。自分のその時の文集と、「自分は今こんなことをしている。君たちは頑張っているか」みたいな手紙を送ったのです。そしたらこの子は頑張ってると言って返事をくれて、ああ、よかったねといってまたすぐに手紙を送り返しました。

今まで話をしたことは、みんな最初の学校の実践なのです。年を取ったからいい仕事ができるというのは、絶対にないですね。どちらかといったら若いときの方が馬力があっていいなというふうに思います。やはり若い先生がどんどん増えなくてはいけないと私は思っています。

③書かずにおられないことも書く　読み合う

書かずにいられないことを書こう。言わずにいられないことを書こうと。あなたの心の中に言いたくて叫びたくて仕方のないことはありませんか。我慢して、我慢して、心に涙がいっぱいたまっていることはありませんか。心が重たくって一人で耐えられなくなっている・・・そんなことはありませんかという働きかけをしました。

この時分、全国の実践から学ばなくてはいけないと思いました。雑誌「教育」を読みました。丹羽徳子さんという恵那の実践家を知り、『明日に向かって』という実践記録本を読みました。実践のすごさが分かりました。子ども同士が話し合っている日記が出てくるところがあるのです。「誰々ちゃん、あのことは書かなきゃ駄目よ」みたいなことを友達同士で言い合うのです。みんなに言わなければ駄目だみたいなことを、お互い信頼し合っているからなのでしょうけれども、相当僕は無理して子どもがやっているなという気がしました。しんどいだろうな、こんなに詰められたらと思いました。

この当時、日本作文の会の研究大会に恵那や大阪からの参加はありませんでした。日本作文の会が中心になって、組織として、恵那からも人が来る、大阪からも人が来る、みんな一緒になって生活綴方をやっていきましょうよというような働きかけをしようといって、大阪で日作大会をやろうというので動き出していました。東京の方でもそういう動きがあったし、関西の方でもやっていこうということで、近畿の作文の会をつくりました。日作京都大会で、丹羽徳子さんがパネル討議に登壇されました。

そのときに丹羽徳子さんがおっしゃったことが、僕にとっては意外な言葉だったのですが、「子どもには書く自由もあれば、書かない自由もある」と言われたのです。私は、どちらかというと丹羽さんたちの仕事は、書く自由はあるけれども、書かない自由はないのではないかと思っていたのです。先生が、あなたはこれを書くことがとても大事なのだということを詰めておられる気がしていたのです。丹羽徳子さんがそんなふうに言われたことが意外で、僕は、「へえー、こんなことをおっしゃるんだ」とショック、ショックではないですね、いいことをおっしゃったなと思いました。丹羽さんが言われることに意味があると思いました。

でも、この時分は、まだ書かずにいられないことを、あなたにとって苦しいこともみんな言えるようにしましょうよということを一生懸命言っていた頃です。「私のお父さん」を読みます。

私のお父さん　　六年　A・M

私のお父さんは、十九才の時に、会社で事故にあいました。どういう事故かというと会社の機械がこわれて、その機械に手がはさまって、上からあついあつい湯がかかって、身体全体やけどだらけで、おまけに右手せつだんになりました。私は、お父さんの体のやけどをみていると、あつかったやろうなあと思います。

私の家に来る友だちは、なぜ一番おくの戸がしめてあるのだろうかと思っていると思います。なぜしめてあるかというと、お父さんはいつも家にいるときは顔も見せて、体も見せて、パンツとはらまきだけでいるからです。お父さんは、人がきゃはったら、おくのへやへ入っていかはる。私は、そんなしんでもいいと思うけど、はずかしいような気もする。お父さんは、私よりも、くるしんでいると思う。

それから、どこか行くとき、お父さんと歩いていると、まわりの人が、お父さんの顔をじろじろみやはる。私はその時、まわりの人にこういってやりたい。

「そんなん、みんでもいいやろ。自分が、そんな目にあったら、かなんやろ」

先生は、お父さんにあったことがありますね。その時、どう思いましたか。お父さんは、先生にいいましたか。先生はききましたか。

お父さんもなりたくてなったんじゃないから、私はお父さんのことを考えます。みんなはどういうだろう。どう考えるだろう。どううけとめてくれるだろう。

これはＭさんという子でしたが、「Ｍさん、しんどかったことがあんねんな。お父さんはもっとしんどかったやろな。でも、そういうことを気を使ってくれる娘がいて幸せなんやな」というような話をしました。ひとり一人に根ざすには、「本当のことを書く」「書きたいことを書く」「自分の言いにくいことも書ける自由を獲得する」ことだということを、教えてもらったと思います。

佐古田好一さんという先生は初代の京都綴方の会の会長さんなのですが、同授研の事務局長をしておられた方で、その方が「クラスの子どもの中で一番言いにくいことを持っている子が、それを言えること、それをクラスでお互いに支え合えるクラスこそ目指すべきクラス像だ」とおっしゃっていました。この先生は同和教育をずっと進めておられましたから、そういうことも含めてこういう発言をしておられたのです。一番言いにくいことを持っている子がそのことを言えたときに、それは何でも言えるクラスだと。「好き勝手にばーっと言っているのは、言いたいことを言っているのではない」ということをおっしゃいました。大変分かりやすかったです。しんどいことは「しんどい」、つらいことは「つらい」と言える、分かり合える、そういうクラスを目指したいと思っていました。この当時、やはり相当力が入っていたのですね。自分の肩に力を入れながら何か物を言っていたように思います。「お母ちゃんの子どもの時」という詩です。

お母ちゃんの子どもの時　　五年　K・Y

お母ちゃん
二才の時に　何かの病気で

耳と口　不自由になったん
先生　前に
どっかの小学生の人が
お母ちゃんみたいな人に
石投げたりしたっていってた
お母ちゃんも子どもの時
近所の子に石投げられたりされはった
人に石投げられたり
きしょく悪がられたらかなんやろ
横目で　見られたらかなんやろ
お母ちゃんも
ほかのしょうがいしゃの人も
すきで　耳と口不自由になったり
足とか不自由になったんちがう
みんな同じ人間や

この子のお母さんに参観日に来てもらおうと。参観日にお母さんが来られたことがなかったのです。来られたことがないし、来てもらおう。そのときに、みんな自分の名前ぐらいは手話でできるようになろうといって練習しました。それで、ちょうどそういう方には京都市から手話ができる人がついてきてくださるのですね。「私は誰々です」と名前を言って紹介して楽しくしてもらおうではないかと言って、参観日をしました。そしたら来てくださったのです。この子は僕にはうれしそうにしているように見えました。みんなで認め合うというのは、そういうことなのかなということを思いました。

―休憩―

④私に気をかけてくれる人がこんなにもいる
（小宮山）　予想されていたと思うのですが、初めから最後まで絶対に終わらない。もうこれだけにしておいたらいいのに、何か付け加えたくなるのですね。こんなこともしたぞみたいなことを入れたくなる。これはもう何かさがですね。すみませんけれども、途中で終わる話ばかりになって申し訳ありません。

今、「私に気をかけてくれる人がこんなにもいる」というところまで来ています。この子は、一言で言うと虐待されていた子です。食べさせてもらえない、洗濯してもらえない、いじめられる。義理の母からです。そういう子どもとどういうふうにしたかということを書いています。この子を裏切らないように他の子に知らせるのにどうしたかの記録です。一生懸命考えた仕事です。また読んでいただければありがたいです。先ほどのしゃべれないお母さん、やけどをされたお父さん、このクラスの中に、この虐待を受けていた女の子が入ってきたわけです。その子らをクラスのみんなが励まし合って、この子に「日記（生活勉強と言っていました）を書け。小宮山先生が読んでくれるから」と励まして言ってくれてこの子が書いて、それを状況を見ながらみんなに読んでもらったということがあった

わけです。

⑤二人いっしょに来てもらいたかった

　このクラスには、お父さん、お母さんのどちらかがおられなくて、片方のお父さんやお母さんがおられるだけという子どもがたくさんいました。その子らの一人だった T・Y さんの話をします。11 ページを開けていただけますか。詩集の 46 ページにも三つの詩が出ています。その三つとも読んでみます。

　キンモクセイの花が咲く頃に、校区に神社がありまして、そこの神社はキンモクセイだらけで、みんなで行ってキンモクセイの中で遊びながらこの詩を書いてみようと思いました。これは割とよくしたのですが、何かに思いを託すような詩を書く。例えば雲に向かって何か言う。「おーい、何とか」と言って呼んで、「今、僕はこんなことをしているぞ」だったり、そういうことを詩の書かせ方としてやっていたのです。これはキンモクセイに思いを託して書いたものです。

　　キンモクセイ　　六年　T・Y

秋になると
学校はいいにおいでつつまれる
あまいにおいでつつまれる
オレンジ色の小さい四まいの花びらの
かわいいかわいいキンモクセイの花で

しかしその命ははかない
雨がふったら
風がふいたら
かわいいキンモクセイの花は
みんなおちてしまう
みんなしんでしまう
そして・・・・・・たくさんの人にふまれていく
短いキンモクセイの命

キンモクセイを見ていると
時々思うことがある
お母ちゃんもキンモクセイの仲間かなって
お母ちゃんは二十九歳で死なはった
ふつうの半分もこの世にいなかった
だから思う
お母ちゃんキンモクセイの仲間かなって

もしも私の家に

大きな庭があったら
たくさんキンモクセイを植えてみたいな
そう思っている
今はいないお母ちゃんと思って
大事に育てたい

この子のお父さんは、長距離のトラック運転手さんでなかなかおうちに帰ってこられないということもあって、母方のおばあさんがこの子を見ておられました。3 人でアパートで暮らしていたのです。この詩は 4 連で、起承転結になっています。私は構成の指導をしていたと思います。はじめ・なか・おわりにするのか、序破急にするのかみたいなことを教えていました。この「キンモクセイ」は、1 連目はキンモクセイの描写から始めると決めていました。

どうやって書かせるかというときに、俳句や川柳では題を与えて書かせる方法と自由に書かせるという方法があって､川柳は必ず下の句から発想させて五七五を作らせています。私は書き方を教えていました。

次の「つわぶき園」、これは自由に書いたものです。

つわぶき園　　六年　T・Y

私がまだ三つの時
お母ちゃんが亡くなった年
つわぶき園に入った
お父ちゃんと
近所に住んでいたおばあちゃんと
私と三人で
車に乗ってさがしまわって
やっと見つかったのが
つわぶき園

つわぶきには一年もいなかった
三つまでしかあずかってもらえない所だったから
つわぶきに行ってたころ
今でもよくおぼえてる
行き帰りは
毎日お父ちゃんの車で
給食はカレーやサンドイッチ
おひねるはごはんのあと
まどガラスにはいろいろな絵があって・・・
そんなつわぶきが今は全くちがう
たてものはきれいにたてなおし

遊ぶものはいっぱいふえて
いいなあこんなきれいになって

私の行ってたころは
たてものは古く
遊ぶものは古いすべり台ぐらい
でもそれでもよかった
私にはとってもよかった
たまにはおこられたこともあったけど
今ではとてもいい思い出
先生に会いたいなあ
友だちに会いたいなあ

3 歳の頃の記憶があるというのが、すごいと思います。何度も家でお話をお父さんとしているのか、おばあちゃんともするのかよく分からないですけれども、実にリアリティがあります。保育園の中で温かく育ててもらったのだなということがよく分かります。この子は、「卒業式」という詩を書いて卒業しました。読みます。

卒業式　　六年　T・Y

もう少しで卒業式
卒業式には
お父ちゃんお母ちゃん
二人いっしょに来てもらいたかった
考えても無理な話やけど

お母ちゃんはもう八年以上も前に
死んでしまった
仏だんの前にいくと
ふと小さなころのことを思い出す
―ああ、二人でよくおりがみおったなあ
―すぐ泣いてよくおこられたなあ
―ねる前いろんな話してくれたなあ
考え出すといくらでもうかんでくる
思い出していると
急にお母ちゃんにあいたくなる

お母ちゃん
私はこんなに大きくなりましたよ
お母ちゃん

私は元気で今まで生きてきましたよ

小さい頃
電話がかかってきただけでないてた
―お母ちゃんどっかいかなあかんのとちがうか
って思ってギャーギャーないてた
そのたびにお母ちゃんは
「あとからかけます。すいません。」
ってあやまっていた

小さい頃
しょっちゅう病気にかかっていた
へんとうせんの熱だしたり
ひきつけおこしたり
めいわくばかりかけていた
お母ちゃんがいなくなって
私はすごくかわった
そんな気がする
あんまり泣かなくなった
健康になった
今ではめったにかぜもひかない
学校もあんまり休まなくなった
本当に健康になった
お母ちゃん
今の私見たら
喜んでくれるだろうな
まだまだ直せてないとこたくさんあるけど
いつの間にかじょうぶになった
本当にお母ちゃんにあいたいなあ
この姿を一目見てもらいたいなあ

卒業式には
お父ちゃんお母ちゃん
二人いっしょに来てもらいたかった
考えても無理な話やけど
でも私は
―卒業式にはお母ちゃんも来てくれる
って思う
私の心の中で
「T 子おめでとう。」

そう言ってくれるんじゃないかな
もしきてくれなくても
私は私なりに
きちんと式をすましたい
「私はもう中学生になります。」
そういっても
笑われないようにしたい

この詩が書かれた頃、儀式としての卒業式を変えようということに取り組んでおりました。それで、この詩をプロローグに使おうと。卒業生入場の前にこの詩を流す。会場で聞いていただくというのにこの詩を使わせていただきました。もう私の趣味でしかないみたいなところがあるのですが、これを使ってみんなが「ああ、今から卒業式だな」という気分が盛り上がったらいいなと思ったのですが、それは私だけですね（笑）。私だけが思うという話。

⑤子どもを応援する

小さい子どもの話をします。2 年生の子どもで滋賀県から転校してきた子がいました。夏休み後の転入生でした。看護師のお母さんでした。母子家庭で、弟と 2 人の兄弟でした。お母さんが連絡帳に書いてこられました。「この頃、私の仕事が夜勤午後 4 時から 11 時半、だいたい帰ってくるのが午前 1 時から 2 時、翌朝午前 8 時からという仕事なので帰ってきたらすぐ眠ってしまうという感じです」と。理科室におられたのですが、お母さんはうつ伏せで寝ておられました。「誰々君いますか」と僕が入っていったら、本当にしんどい顔をして顔を上げられました。「こんなんなんですわ」と言っておられました。離婚されたところでなかなか大変だろうなと思いました。

それでこの子が、11 月に弟が保育園にやっと行けるようになったので喜んでいますという話で、こんな連絡帳を書いてこられました。「私が送り迎えできない時は、K に行ってもらうように、又一つ負担をかけようというか、責任を持たそうと思います。早速八日から迎えに行ってもらおうと思うのですが、本当に申し訳ないのですが、保育園までの道順を教えてもらえないでしょうか。K に」と。これは私に教えろということなのですね。そんなことありかと、私は思ったわけです。いくら何でもそれは駄目だろうと私は思って、腹が立ったのです。弟はまだ 4 歳か 5 歳で、その子を送り迎えするのだったら、大体「ここをこう行って、道路を渡るねんで」とか、「ここで気を付けて行きや」とか、教えながらちゃんとしなかったら、そんなもの駄目だろうと思ったのです。ナンデオレガソンナコトマデセンナランネン！と思ったのです。正直な気持ち腹立って仕方がない。それでも連れていったのです。そしたら弟は、Mという名前ですが、「今日は来ていません」と保母さんが言われるのです。余計に腹が立って、それはないだろうと思って連絡帳を出させて、こう書いたのです。「保育所の決まりをもっとしっかり調べて、どういうふうにK君が行動したらいいのか、具体的に指示してやって下さい。そして彼が自由に遊べる時間も保証してやって下さい」と。これは当たり前のことを僕は書いていると思ったのです。でも、こういうふうに言ったり書いたりして、お母さんに通じるかどうかは別なのです。本当につらい

目をして一生懸命頑張っておられるお母さんに追い打ちをかけるようなことを書いているわけです。これが通じるわけがないと後から気が付いたのですが、腹が立ったものだからそう書いたのです。

放課後この子を残して、この子はちょっと勉強がしんどかったから、「残り。一緒に勉強しよか」と言って、勉強しました。そしたら、この子が弟を保育園まで連れていく話をしてくれたのです。それを聞いて、先ほどの文章に急いで付け加えたのです。「今日放課後、今朝のことを聞きました。朝起きて、ごはんもしっかり食べて、戸締まりもして、弟を連れて保育園へ行ったそうです。私はその話を聞いて、しっかり頑張っているので、涙が出そうになって抱きしめて頭をなでました。本当に頑張っています」と。そして、「えらいなぁ、お前は」と言ったのです。でも、これは何のことを言っているか分からないので、「君な、今、先生に話してくれたこと書いてくれるか」と言って、もっといい紙を渡したらいいのだけど、それこそざら半紙を 3 枚渡して「これに書いておいで」と言ったのです。そしたら書いてきてくれたのが、「弟のほいくえん」です。

弟のほいくえん　　Y・K

きょう　ぼくは、弟をほいくえんにつれていきました。
そして弟がいいました。
「おにいちゃん　おき。」
と弟がいいました。ぼくはそのときねていました。そして、ぼくがいいました。
「ああ。」
といいました。
「もう朝か」
といいました。そしておきていいました。そして弟がいいました。
「ぼくな、グーニーズのな、2 めんいって、スーパーマンとった」
といいました。そしてぼくがいいました。
「それはな、ピーマンやで。だからスーパーマンちがうで。」
といいました。そしてぼくがいいました。
「はやく、朝ごはんたべよう。」
といいました。
「なんやこれ。」
とぼくがいいました。
「これは、あんぱんかな。」
とぼくがいいました。そして食べていきました。そしてきがえていきました。そしてかぎもしめて、かばんをしょっていきました。そしてエレベーターにのっていきました。
エレベーターをおりて、あるいていくと弟がいいました。
「アクマイザースリーみたい。」
といいました。ぼくが
「ほいくえんいってから見たら。」
といいました。

「そうしたら、かばんもちち。」
といいました。ぼくがいいました。
「わかった。」
といいました。そしてぼくがもちました。
そして、やっとがっこうにつきました。
「やっとついた。」
とぼくがいいました。弟がいいました。
「はよいこう。」
といいました。
やましな川までいきました。そして弟がいいました。
「かばんもつ。」
といいました。そして
「早くいこう。」
といいました。弟がいいました。
「な、いこう。」
といいました。ぼくが
「見えたぞう。早くいこう。」
おうだんほどうをわたっていきました。
「早くわたり。車にひかれるで。」
といいました。そしてまっすぐいって、右にまがりました。そして、ほいくえんにつきました。そしてぼくは、考えました。だから、7 時 45 分に出て、8 時 30 分につきました。
「あれ。」
とぼくはいいました。
そしてせんせいがでてきました。
「弟つれてきました。」
とぼくがいいました。そしてぼくがいいました。
「弟のげたばこはどこですか。」
とぼくがききました。そしてMのせんせいがでてきました。せんせいが、二人でてきました。
「Mくんのげたばこは、ここです。」
とおしえてくれました。ぼくは、
「おはしとコップわすれました。」
とぼくがいいました。
「おかあさんが、ふとんとうわぐつはもってきます。」
ぼくがいいました。
「ぼくも学校にいいくから、ぼくいってきます。」
といっていきました。
はしっていきました。

この後に「むかえにいったこと」というのも書いてきたのですが、作文が書けない、宿

題が書けないといって困っていますとお母さんは書いてこられたのです。それで、この子が遅れているのは作文だけではなかったのですが、それは書けないだろうなと僕は思いました。でも、これだけよく書いたと思うのです。何か味があるでしょう。何かこの子の書いているものにね。これは私だけが読むのではもったいないと思ったのです。それで、保育園の人も何かちょっと困っておられるような感じがしたので、保育園の人も何か分かっていただけないかなと思って、文集を作りました。この文集と私の手紙を添えて保育園へ持っていってもらいました。すぐに返事がかえってきました。

K 君の先生へ

先日（24 日）作文をＫ君からもらい、読ませていただきました。保母みんなで読みました。

Ｋ君とM君のなかのよさとがんばりがよくわかりました。そして私達も、がんばらなあかんな！と思わされる・・・・・・そんなふうに思います。

M君のおくりむかえも、もうすぐ一ヶ月がたとうとしています。M君も保育園生活に慣れ、嫌がることなくとても喜んで登園してくれますので、ホッとしています。本当に、うれしそうに走り寄っていくM君とニコニコ顔のＫ君、そんな毎日です。

これから、ますます寒くなって朝も大変だと思いますけどＫ君には、がんばってほしいです。

最後になりましたが、お手紙と作文ありがとうございました。

とにかくこの子の回りに、この子が育っていく上で仲間になってくれる人をつくれないだろうかと考えました。クラスの子どもらもそうですけれども、保育園の先生も巻き込んで何かというふうに思ったことがうまくいったような気がして、私はとてもうれしかったです。この手紙などを読んで、お母さんが手紙をくださいました。

お母さんからの手紙

仕事が忙しくて午前 3 時近くに家に帰ってみると「ゆきだるま」（一枚文集名）がテーブルの上に置いてありました。多分、子どもがゆきだるまに書いてもらった事が嬉しかったのでしょう。見て欲しかったのかな。何か誇らしげに置いてありました。手に取って、目を通してみて、二人で頑張って行っている様子がよく分かりました。

朝、私が深夜でいない時は、ちょっぴり弟の世話は大変みたいです。でも弟も親がいなかったらいないなりに兄貴の言うことをよく聞いている様です。

京都へ来て、約 4 カ月たとうとしていますが、親から見てもすごく子どもたちが成長してきたように思います。兄貴の方なんか、特にです。以前はメソメソ泣いたりしてどうなるのかなと思っていたのですが、多分まわりの人たちが、とても良い人たちばかりなのだろうなと思っていますし、感謝しています。

作文日記書くことが苦手だったのですが、何とか書けるよう努力しているようです。

この部分が、書いていなかったので、私が書かせていただきました。

つかれた身体にムチ打って帰ってみると、
テーブルの上に　息子のほこらしげな
顔が浮かぶよな　プリント二枚
我が子とも思えぬ位
ほほえましい親のいない登園風景
かわいそうやな　大変やろうなと思いつつ
心を鬼にして
いつか　よい思い出となる日を願いつつ
人の心に　感謝し、涙流す　私かな

お母さんの気持ちが大変よく分かりました。いいかげんなお母さんではない。私は初め、いいかげんなお母さんだと思っていましたが、でもそんなお母さんではなかった。大変よかったと思っています。

なかなか作文が書けないというのが、先ほどのプリントを 3 枚渡してから、めきめき書くようになったのです。次の「サンタクロースがきたこと」というのは、なかなかいい日記だなと思います。

サンタクロースがきたこと　　Y・K

二十四日の夜、お母さんが、おしごとでいませんでした。ぼくたちは二人でした。Mと僕でいっぱいくつ下を家の木にかけました。
Mが言いました。
「サンタクロースがくるかなあ。」
といいました。ぼくが
「くるかなあ。」
と、いいました。
（本当にくるかなあ。だけど、お母さんにはうそついて、おこられるし、こないのとちがうかなあ。くるくる、やっぱ、ちゃんとくる）とおもいながらねました。

よく日、おきてくつ下の中を見たら、はいっていませんでした。お母さんがいいました。
「あんたが、うそつくしこなかったんとちがうか。」
「ああ」
と、ぼくがいいました。

そして 26 日の朝、Mがおきて
「お兄ちゃん、おきて。」
と、大きな声で何回もいいました。おきてみると、マクラのところに大きなはこが二こありました。ぼくは、サンタクロースがきたのでうれしく思いました。Mとさっそくあけました。ぼくがほしかったロボットのオモチャでした。そして、うれしくてMとさわぎました。
お母さんがおきてきて
「サンタさんきてくれてよかったなあ」

といいました。Mが
「サンタさん、お母さんと、ちがうかなあ」
と、いいました。お母さんが
「サンタさんは、いるとしんじている人の心の中に、いつでもいるんとちがうか。KとMはしんじてたから､サンタさんがプレゼントもってきはったんと思う」
といいました。
ぼくは、やっぱり、大きくなってもサンタさんはいるとしんじます。

いいなと思うのですよ。
暉峻淑子（てるおかいつこ）さんという方がおられます。岩波新書で『ほんとうの豊かさとは』という本を出されて、その後に『サンタクロースってほんとうにいるの？』という絵本を作られました。本当にいい絵本です。子どもがお風呂に入っているときに、一生懸命「サンタクロースって本当はいないのちがう？」とか､「お父さんやろう」とかと言い合う。うまく子どもの関心をひくような答えをしながら、そうだともそうでもないとも言わないような展開にしてある。僕のところの子どもは、小学校の先生に「サンタクロースは親だ」と言われたのです。やめてほしいなと思いました。そんなことを言ったらあかんやろうと私は思うのです。「サンタクロースがきたこと」を読むと、お母さんが一生懸命子どもに合わせながら話をしておられて、いいお母さんだなと思いました。
この後、このままではお母さんも子どもも疲れ切って駄目だろう。いつまで続くのかと思っていたのですが、親しいお医者さんが少し遠方で開業されるということで転校していきます。「先生、どう思われますか」とおっしゃったので、「それはいいと思いますよ。お母さんの働き方が変わって、夜、一緒にいられるだけでも十分違いますか」と言って、転校していきました。後で文集を送ったりして、その後、あまり泣いていないので安心してくれと本人が書いてきて、お母さんも手紙を下さり、よかったなと思いました。
「ゆうやけ」という詩があります。これはのり子さんという近くに住んでいた子が、この兄弟、K君のことを書いたものです。読みます。

ゆうやけ　　二年　のり子

きょう　ゆうがた四じはんぐらいから、二とうのよこで、きれいなゆうやけが出ていました。そのとき、いもうとときていました。
いもうとに
「きれいやなあ。」
といいました。いもうとも
「きれいやなあ。」
といいました。
そして、ずっとあるいていくと、Y・K君がいました。
「Yくーん。」
といいました。Yくんが
「ハーイ。」

とゆわはりました。わたしが、こういいました。
「ひとりできたんか。」
とききました。Ｙくんが
「うん。」
とゆわはりました。
「なにしにきたんや。」
とわたしがききました。
「ゆうやけ、見にきたん。」
とゆわはりました。
Ｙくんが
「あのまるっこいキラキラのやつ。」
とゆわはったし、わらっていました。

この子の妹とこの子と、それからＹ君と 3 人で、団地に 3 人が立って夕焼けを見ている。何か希望がある感じがしていいなと思いました。

この頃の日本作文の会の活動方針に、こんなことが書いてありました。

「指導が子どもに通じなくなり、子どもの前に立つ喜びを失いかけている教師は少なくない。子どもをめぐる状況がともすれば否定的にしか見えないなかにあっても、それでもなお、子どもたちは、生き方をともに考えてくれる教師、ともに歩んでくれる教師であることを切望している。不安やつらさを抱き、苦悩しながら生きている子どもたちへの限りない共感を根底にすえ、ともに、この時代を生き抜くもの同士の連帯を作り上げることに、教師としての生きがいと喜びを回復していきたい。そして、その際、子どもの背後に存在している父母のくらしにも生活者としての共感と連帯をつくることが重要である」。

この言葉は、私は今も生きていると思っています。今、保護者との関係はますます難しくなっていますが、やはり共感が大切です。共感関係をつくっていくことがなかったら、何をするのも難しいだろうと思います。

僕が石田小学校にいたときに、ちょうど日の丸・君が代の強制というものがありました。それに対して、卒業式をつくっていく、創造していくことが大切だと考えていました。そのときのキーワードにしていたのが、一つは斎藤喜博さんの「卒業式は最後の授業だ」という言葉でした。私は学生の頃、斎藤喜博にあこがれていまして、授業で勝負するということにあこがれていまして、「開く」という雑誌を読んでいました。その斎藤喜博さんが卒業式は「最後の授業だ」とおっしゃっていて、この最後の授業だという見方はとてもいいと思っていました。6 年を持ったときに、実践を修学旅行、運動会、学芸会、卒業式と、ずっと絵巻物のように展開していく。筋の通ったものにしていくというような思いもあって、卒業式もその一環だという思いでやっていました。この当時はアイ、アイというのは己、自己確立の「I」、それから目、しっかり見つめる「EYE」。それから「愛」ですね。そういう三つのテーマをかかげて仕事をしていました。

子どもが主人公だということもキーワードで、子どもが主人公の最後の授業というイメージでした。演壇をフロアに下ろしました。演壇をフロアに下ろして、舞台にひな壇を作って、そのひな壇のところに子どもたちが座る。主人公は子どもだと、見える形にしまし

た。日の丸の旗ではない。校長先生が主賓ではない。校長先生には下に下りてもらう。子どもを主人公にしていこうというふうにしました。大きくフロアが空きますので、そこに花を置いて花道を作る。それから卒業証書は、ちょうどまたそのときに手作りの和紙ができる先生が転任してこられたのです。そういう技を持った人が。その人に和紙のすき方を教えてもらって、コウゾやミツマタなどが手に入らないというので京都の黒谷という所に行って手に入れて、それでフタバアオイという植物を育てなければいけないのですが、それも育てました。それに校長先生が賛同して下さって、版木を作ってくださって、それを1枚1枚刷って、世界に1枚しかない卒業証書を作ろうといって実行しました。

卒業証書授与のときには､名前を呼ばれたら返事をして､演壇の上にあるマイクの前で、これから私はこういうふうに生きていきたいというようなことを話す。そして横にはスライドがあって、赤ちゃんのときの写真が写る。一番下のところには父母の願い、こうなってほしいとか、あんたはこうだったということを書いてもらうというので過去と現在と未来が一体化する空間をつくろうという卒業式をしました。これを何年か続けることができました。

そういうことをしていたので、その中に日の丸・君が代がどう入るのですかと問いました。創造的なことをやることで、日の丸・君が代体制と対峙していこうということを考えました。これはすごく志は高かったわけです。そういう案を職員会議でもどんどん提案していきました。

校長先生はそういうことがよく分かる人でした。われわれに「先生方が自由にやってください。先生方が一番得意なことをそれぞれに出し合ってやりましょう」とおっしゃいました。その先生のそんな言葉を信じてやっていたのです。ところが、京都市教育委員会の指導の名の下でめちゃくちゃな強制で、この校長先生もどうしようもないところに追い込まれました。毎日10時になったら電話がかかってくると言っておられました。「ちゃんとできるようになったのだろうな」「決まったのだろうな」と言って責められたそうです。ひどいやり方でしたね。指導と言う名の強制ですね。本当にひどかったです。

それで、私たちは私たちでやろうといって、ビラまきをしました。それから教育懇談会を開いて「今、学校でこういうことが起こっている」という話をして、非民主的だ。創意工夫を壊していくものだから何とかしてほしいと、校長さんとも話し合ったりしていたのです。そしたら、親が立ち上がってくださったのです。署名を集めると、4日で465名の署名が集まりました。一学年2学級、全校生徒数400いくかいかないかの規模の学校です。そこでこれだけ集めてくださったのです。それで校長、市教委に抗議電話をしてくださって、僕らも校長先生と話し合いました。「先生、話し合いで解決しましょう」と言ったのですが、日の丸君が代が卒業式に入りました。

卒業式の前日に、特別支援学級の先生、それから担任2人、この3人と卒業生の保護者で話し合いました。私たち3人が起立するのかどうか、それを心配してくださっていて、不起立だったら先生がひょっとしたら解雇されるのではないか。それでは駄目だから､「もし先生が座るとおっしゃるのだったら、私たちは先生の周りを取り囲んで先生が何をしているのか分からないようにします」と、そこまで覚悟を決めて言い切って下さいました。付け加えて､「先生、子どもたちは素晴らしいですよ」と。そのときは何のことを言われているのか分かりませんでした。

当日どうなったかといいますと、「君が代」はやはり鳴りました。教頭先生がラジカセを持ってきて、スイッチを入れて「君が代」が鳴り始めたのです。そしたら、うちのクラスのＦ君という子ですけれども、「僕たちはそんな歌、歌いたくありません。そんな歌、歌うぐらいなら、小宮山先生に習った『たんぽぽ』を歌います」と言って、「1、2、3」という掛け声が起こって、「雪の下の・・・」と歌い始めたのです。彼らは歌い切りました。それで着席しました。5 年生も座りました。在校生も。保護者も座って、保護者は拍手をするのです。私は座っていたのですけれども、その「たんぽぽ」を聞きながら涙が出ました。足が震えました。そういう卒業式でした。

私が式が終わった後に教室に戻ったら、保護者がだーっと入ってこられてみんなで拍手してくださって、その後、「先生、初めから最後までずっと青春ドラマでしたね」と言われたのです。「昨日の晩、子どもたちの計画を聞いて、子どもを抱きしめてやりました」「親どうし電話をかけ合って『よかったね』と言って泣いたんですよ」と。

これは、こんなふうに子どもを追い詰めることを私はしたのだなと思って、こんなことが全部よかったと思いませんけれども、私はこの子らに「君らな、ええ子らなんやけどな、自主性がない」と言っていました。でも、この子らはすごい自主性というか、無謀というかを持っていたのだなと思って、私はこの卒業式でたくさんのことを学びました。教育の中身を創造することはまさしく戦いであり、父母と手をつなぐことでしか達成できないことだということです。

このことを契機に、「たんぽぽの会」という教育懇談会が恒常的に活動することになりました。私の勤務したこの学校は、先ほど言ったように公団住宅や市営住宅、マンションなどの集合住宅ばかりの、ふるさとというのとは縁遠いところにある学校です。でも、そこで育っている子に、何かしようではないかということで夏祭りをしたり、私の後に入ってこられた校長先生が、「小宮山先生、校舎の周りずっとローラースケート場にしませんか」と言われたのです。そしたら休みの日にでも子どもが遊びにくる。「それは面白いですね。先生、本当に実現できるかな」と言ったら、「やれるかもしれない」と。そういう案も含めて、学校の中で性教育をどうするかとか、まずはいろいろと話してみる。この後、僕はこの学校を出ていくのですが、出ていった後も教育懇談会は続きましたし、和紙の証書も続きました。よかったなと。今はどうですかね。分かりませんけれども。

松永先生は、こんな詩を書かせてはいけない、大人にはそれだけの責任があるとおっしゃった。そういう世の中にしていくために何を私らはしなくてはいけないのかということを、これで教えられたのです。

⑥隠さなければならないものは作らない

上京区の、京都市のど真ん中の学校に転勤になりました。たまたま教壇を動かしたら、戦前・戦中の児童の作った新聞の切り抜き作品、校内・校外児童心得、日の丸の小旗、教科書、出征する父兄の写真などが出てきました。「えらいもんが出てきたな。何でこんなもんが入ってるんやろ」と言っていました。そしたら、その中の写真を見たある子どもが、「これ、うちのおじいちゃんや」と言い出しました。「うちのおじいちゃんの写真がここにある」と言って家に持って帰って聞いたら、その写真が何に使われたかが分かったのです。出征兵士を家族に持つ子らは、奉安殿の前で校長先生と特別に記念写真を撮るのです。戦

意高揚のために、恐らくそれが授業でも使われたのだろうということが分かりました。では、何でそれが教壇の下に入っていたのか。その辺のことを、「ああ、それだったらきっとこうだ」と校区の方が言ってこられました。それを京都新聞が記事にしてくれたのが以下のものです。

京都市上京区 A 小学校で先日、ちょっと変わった日曜参観があった。同校で昨夏、戦時中の出征兵士の写真が見つかったことがきっかけで、戦時中に在学した同校卒業生の話を児童や保護者が聞くことになった。

登壇した五十代の男性二人は「当時の生活はすべてが軍隊調で厳しかった」と振り返った。

その頃の授業では先生が日本とアメリカの戦闘機の絵を交互に見せ、児童に即座に答えさせるのだが、間違えると「敵と味方を間違えてどうするか」と低学年でも容赦なく殴られたという。

男性の一人は「学校が本当に怖かった。下校の時、校門を出るとホッとした」と話した。

ところが、ラジオから聞き慣れないことばが流れた日を境に学校が変わった。怖ろしかった先生が優しくなった。それどころか先生たちは、今まで大切にしていた物を焼き捨てたり、教壇の下に隠し始めた。

当時一年生だった男性が訳が分からないまま何かが変わったことを悟った。「その日」が終戦と知るのはずっと後のことだ。男性は、見つかった兵士の写真もどうやらその時に隠されたのだろう、と推測する。

今から当時を振り返ると、終戦で何もかもが、変わったように見える。でも校舎は以前のままだったし、先生、児童の顔ぶれも同じだった。終戦で優しくなった先生は、人格が変わったわけでもない。

終戦時の出来事に限らず、世の中とは何らかの考えに左右されてがらりと変わってしまう危うい存在なのかもしれない。終戦の場合は、軍国主義という考えが息をひそめて世の中は良い方向に変わった。だが、当然、逆もあり得る。

話のあと児童の一人は「おじいさんの子どもの頃に比べて、私たちはしあわせ」と感想を述べた。子どもたちが幸せと思う世の中がいつまでも続いてほしい―赤茶けた兵士の写真が掲示された講堂で、参加者はそんな願いを思い浮かべた。

（出典：京都新聞 1993 年 3 月 2 日夕刊「プラスα　平和な世の中　変わらずに…」社会面、9 頁。※学校名は匿名に変更した。※京都新聞より転載許可を得た。）

私たちは、都合が悪くなったら燃やさなくてはならないものを、二度と作ってはならないのだと思います。「放課後が終わったら運動場でいっぱい物を燃やしてはった」と。GHQ が入ってくるということで、先生たちは慌てて燃やしたのです。その一部を、これは想像ですが、全部燃やすのは忍びなかった人が一部教壇に隠したのだと思います。全部否定されたのですね。全部否定されるのが嫌だったから残されたのではないかなと思いました。

この話してくださった方は面白い方で、烏丸の四条に GHQ の事務所ができ、そこに占領軍が入ってきたときに、この人は見にいったそうです。他の人はみんな、自分の家の中

に隠れて見ないようにしていたのです。何をされるか分からないとこわがって。でも、この人は行ったのです。なぜかといったら、キリスト教だったから。戦前キリスト教の信者だからといって、「お前は天皇とキリストとどっちを信じるのだ」と問い詰められたそうです。GHQ が来たときは、あの人たちはキリスト教の人だからと思って行ったそうです。烏丸通をだーっとジープが上がってきて、ものすごい威圧感を感じたと言っていました。

そんなことがあって、この資料をどうするか考えました。これは残しておこうといって残すことにしました。でも、この学校は廃校になってしまったのです。この後、この資料は学校に残した方がいいのか、資料博物館みたいなものがあるからそこに渡すのか、それはもう校長先生にお任せすることにしました。多分、きっとこんなことに使われたのだろうという説明のラベルを作ったのだけど、でもその後どうなったのか分かりません。残っているのかな、残っていないのかな、分かりません。

第 4 章　ひとり一人に根ざす綴方教育②

①荒れる子どもたちと発達課題のある子

発達障害を持った子がクラスにいるとき、なかなか思いどおりにならなくて、悩みました。このことを伝えさせてもらおうかと思います。何か私が担任したらうまくいったという話ばかりしていて正直ではないからします。子どもが反社会的な行動をするという言い方ではなくて、子どもが荒れているという言い方をしました。職員室で隣にいた、3 年生の先生が「誰かが階段から突き落としてくれたら私は休めるんだけど」と言われました。「手だったら学校に来なくてはいけないけれども、足だったら骨が折れたりしたら学校に来なくて済む」と。深刻な悩みです。なかなか子どもが落ち着かないというので 2 月に校長や教頭が教室に入り、次の担任は小宮山に決まったということで、4 月から私が担任になりました。

彼らの良いところは、とにかく物おじしない。パワーがある。元気で休まない。この子らは不登校とは全く関係ないです。楽しいことをしたいと思っているのです。担任と仲良くしたいと思っているのです。そして、できればけんかなんかしたくないとは思っているのです。

一番困ったのは、授業をさせてくれないのです。こんなことは初めてでした。こそこそ話す私語ではないのです。教室の端から端まで届くような大きな声で全然関係ない話をするのです。どこからそういう話になるのか、誰かが「俺、巨人好き」と言い出します。すると「俺は阪神が好き、何たらかんたら」「巨人が」と、授業をさせてくれないのです。それからカードゲーム。はやっているカードゲームについて、彼らはすぐ話しだして盛り上がるのです。次に、立ち歩き出します。「どこへ行くのや、君」と言ったらわけのわからない返事をします。笑いが起こります。最後に出ていこうとします。参りました。ノートには猛々しい人間の顔を描いています。私には気色の悪い絵がいっぱい描いてありました。「お話したことをノートに書きましょか」と言ったって書かないし、もう本当にどうしようかと思いました。加えて、教科の好き嫌いがものすごく激しい。僕が国語を一生懸命やろうかと思ったら、「国語大嫌い」と言い出すのです。「そんなこと言わんとやろうや」と言うのですが、「いや、俺、大嫌い」と言う。

その中でも目立っていた 4 人のことを話します。H 君は忘れ物が常習化していて、学校

からの配布物は絶対に持って帰りませんでした。

それからK君という子は、身の回りの整理整頓ができなくて、いつから入っているか分からないようなプリント類とか給食袋とかが、机からわんさか出てくるのです。初めは「一緒に整理しようか」と言ってやるのですが、そんなことをするのが邪魔くさいのです。「先生やって」と。だから、途中から私が整理することにしました。その方が落ち着くのです。

それからM君という子はなかなかで、机の上に足を載せていました。テストでは大声を出しながらふざけた答えを書きます。音楽の聴き取りテストで「一番やさしく温かい感じで歌っているのは何番でしょう」という設問があって、わざとらしいやさしさなので答えはすぐに分かるので、そっちだと書いたらいいのですが、「そんなん人によってちがう」と書くのです。本当にそうですよね。きっとそれが正解なのですけれども。地域のお年寄りに手紙を書こうという取組がはやった時のことです。この学校は道徳の研究をしていました。その中でこういう手紙をよく書かないといけなかったのです。すると、この子は「お前なんか誰か分からないからそんなん書けない」と書きました。正直ですね。でも正直だと困るのです。給食の時間、おかずの容器にマーガリンや牛乳を入れます。そして「気持ちの悪いもの見たい人」とか言うのです。そしたらまた「はーい」とかと言う子がいるのです。そしたら、これを飲むのです。「もうやめとき」と、私も胸くそ悪くなるから「やめときいな」と言うのですけど、不満そうににらんでいました。問題行動もあって、この子は校区にあるスーパーに行って、カードゲームを盗んだりするのです。それで「ちょっとな、これは先生の胸に置いとくわけにいかへんから、お母さんに連絡します」と言うと泣きわめくのですよ。「もう俺は殺される」と言うのです。

それからもう一人O君という子がいました。社会の勉強しようとすると、「先生、体育のラケットベースボールしようや」と言い出す。「いや、今はすることできひんやん。また放課後しよか」と言っても待ってくれませんで、ずうっと言い続けました。一人が作文を読んで感想を言っていると、全然どっちでもいいようなことを質問し倒すのです。質問し倒してどう言うかといったら、「ああ、これで授業時間が少なくなった。ああ、よかった」と言うのです。本当にどうしてやろうかと思うぐらい腹が立ちました。こういうのが常態化していました。女の子はすごくよく勉強もできるし、態度が悪いのは男の子で、特にこの4人が荒れていました。

それで、前年度からそういう状態だったから、参観日にお母さんが覚悟して来ておられて、「何か問題があったらいつでも集まります」と、えらく協力的に言ってくださるのです。それで、「まあまあ、最初の参観日のときにどうするか、ちょっと見てもらえますか。それを見た状態で考えましょうか」と言って、参観をしました。

1時間の算数の授業を何なくするぐらいのことは私にもできたので、やったのです。そしたら、「あの子たちはちゃんと授業を受けられるのですね」と言って、えらく感動して下さいました。でも、その後ずっとそれが続くとは思えませんから、「もうちょっと様子を見ましょうか」と言いました。学ぶ意欲、学ぶ意味、それから学び続ける意思、多少の困難があっても頑張れる気持ち、この子らはそういうこととは無縁です。どうしたらいいか、本当によく分からないままでした。

クラスは21人だったのです。これだけ少ない人数でこんなことになるのだと思いました。定員を40人から減らすと言っていたけれども、20人でもこんなことが起こるのだと

いうので私もショックでしたが、1 年ごとのクラス替えがない環境でした。クラス替えはなしで担任だけ 1 年ごとに替わるという体制でした。この学校は京都市の北部で、地域的には大変落ち着いているのです。近くを加茂川が流れていて府立植物園があって、いいところです。わざわざ出掛けていくぐらい環境のいいところです。

勉強は、よくできる子が多くいました。京都市全体のテストがあったのですが、テストの結果ははるかに平均点を超えるクラスでした。ところが、私のクラスは「準・要保護家庭」「転入児童」「母子家庭」がいずれも約半数近くありました。ある意味では古典的な子どもの生活の不安があり、親が不安定でした。でも熱心なお母さんたちで、迷っておられるのだなと思っていました。その子たちの作品を紹介します。H君の「わたるせけんはおにだらけ」です。

わたるせけんはおにだらけ

ぼくの家の人は全いんおにみたいにこわい
兄だったら、かたいボールを投げてケガをする
妹だったらがんめんをけってくる
父はすごくおこったらなぐってくる
そしてもっともこわいのは母だ
母はバットかカサでしばくし
外においだされる
もうこんなのいや〜〜〜

「あ〜あ、もう嫌、こんな生活」が口ぐせです。本当にそう思っているのかどうか、面白がって言っているのか分かりませんが、こんな詩を書きました。それからもう一人がO君です。

ムリやり行かすな！

火土日天国
水木金月地ごく
とくに月水金は大じごく
2 年のときある所に行くことをかってにきめられた時
「ふざけんなーめんどい
いやじゃそんなもんいくかー」
母に言ったった
けどむりやり〇〇学園（京都の有名な私塾の名前）につれてかれた
今四年自殺しそうになった時は何回もある
じゅくの点数がどうした
学校での事も考えろや
一回たい学相談した

もちろんたい学しようとした
けど校長と母のおどしでつづけている
けど今はふつう
じゅくにいくのはいいけど
宿題がうざい
宿題なんかつくったやつ
地ごくにつれていってやる

この子はお医者さんの子でした。母や父の期待に応えられるほどの成績が出なかったのです。それで塾に行かされて、先ほど朝の時間につまらない質問をいっぱいしておいて、授業が延びたら喜んでいるというのはこの子でした。学習に対する嫌悪感が出た詩です。受験戦争の戦士である彼のもがきのようなものが出ています。

この受験勉強に追われて「うざい」と言っている子と、先ほどの「おにだらけ」と言う子、この子らが時に仲良しなのです。一緒によく遊ぶこともあるのです。ＴＶゲームをして遊ぶのです。ゲームを持っているのはお金持ちの方の子で、一方の子は貸してもらうのです。貸してもらうけれどもなかなか返さないので、トラブルが起こります。それでけんかをするのです。また大きな声で。給食の時間に、びっくりしました。この受験する子が、「黙れ、貧乏人！」と大きな声で言ったのです。私はええっ？　と思いました。「黙れ、貧乏人」、そんな子どものなじり合いを聞いたのは初めてでした。このケンカの発端はＨ君が、「ちょっとお金があるからと思って偉そうにして」と挑発したことだとＯ君は言いました。それを怒ったのです。お金がないとかあるとかいうことの悲しさとかつらさを受け止めて生きていくことは当然あるだろうと思っていたけれども、こんななじり合いをするなどというのは信じらせませんでした。

それで、何ができるだろうと思って、「ぼくの生まれた日」の授業をすることにしました。これは道徳の教材です。「ドラえもん」ののび太が生まれたときを過去にさかのぼって調べるというもので、お父さんとお母さんがどれだけ心配したかという場面が出てくるのです。これで何かできないか。これに取り組みながら、お父さんやお母さんがどんな思いで子どもが生まれたときにいたのかということを、自分は何か愛されていないと思っている子に言ってもらうというのを授業で取り組みました。この教材を使いながら、メインは、お父さんやお母さんに自分が生まれたときのことを書いてきてもらう。手紙をもらう。その手紙を読むという、授業をしました。

私は授業案にこう書いています。「親が注いでくれる愛情をありがたいと感じていると思う。しかし、恩着せがましいことを言われることを子どもたちは望まない。又、そういうことを親から強要されると反発したくなる年齢になってきている。ここは学校の出番だと考える」。学校が教材としてこういうことをやることに意味があると思って、21 名分、書いてもらえないか聞いて、書いてもらいました。

ご家庭から届いたものは、いずれも大変感動的なものでした。どれだけ病気になったかとか、先ほど言った、お母さんに連絡すると言ったら激高して泣き叫んだ子どものお母さんは、身体が弱かったので、K 君がおなかにいる間に何度も病気になって 3 回入院したこと、生まれても羊水を飲んで泣かなかったこと。そして、お父さんもお姉ちゃんもお医者

さんも、みんなで「男前や」と言い合ったことを知らせてくれました。

僕は、お父さんやお母さんに手紙を書いてもらってそれを読むというのを、先ほど川地先生が紹介してくださったビデオの中でもやっています。お父さんやお母さんがどんな思いをしておられるか。子どもが書いたものをお父さんがどう読まれるのかということを伝えていきたいという思いで、時々していたのです。このときは全員で。

そしたらこの子は、「そんなもん、知らんのに書けるか」というようなことではなくて、「お母さん、いつもめいわくかけてすまないね。ぼくは三回死にかけてるから生きててよかった。これからもよろしくおねがいします」と書いたのです。これは、半分照れくさくてこう書いていると思います。でも同時に、絵も描いたのです。それはお母さんとお膳を囲んでいる絵でした。お父さんはどうも出ていかれたみたいで、この子とお母さんと二人で暮らしていこうという意味なのかなと、私は思いました。そしたら、何かで休み時間にしゃべっていたときに、クラスの子が私に「ほんまはあんなやつちがうねん」と言うのです。それで、僕は「そやな、ほんまはあんなやつちゃうわな」と言いたかったけれど、言えませんでした。どこかで、どこまでこの子を信じられるだろうと思っていたのです。なかなかしんどかったです。

このしんどいときに、私が一番励まされたものがあるのです。私は、「ぼちぼちいこか」というホームページをやっています。そこに自分の趣味のことや学校でのことやを書いています。「かばのしっぽ」日記という、日記です。何を書いていたか読みますね。この子らと、お風呂に一緒に行ったのです。銭湯に。自分の校区にある銭湯へ。

子どもと銭湯

クラスの子どもたちと一緒に銭湯に行った。私が浴室へ入っていったら既に 7 人の子らが水風呂中心に遊んでいた。「先生、H 君な、鼻血 2 回も出さはった！」という報告から始まった。聞いたら約束の 5 時よりも 20 分も前から入っているのだそうだ。そう言えば、場所の分からない子は学校集合だったのだが、4 時半から私を誘いに職員室へ来ていた。

私がサウナに入っていったら、鼻血の世話をしてくださった方が、詳細を話してくださった。「ありがとうございました」とお礼を申し上げた。その方は、一緒にサウナに入っていたやせ気味の子に、「わしもこの子と同じで鉛筆みたいに痩せてた。お前、あんまりご飯食べへんやろ」等と話しておられた。この方は子どもと一緒に風呂に入るのを嫌がっておられない方だと分かる。

電気風呂で、「うわー、ビリビリや」と歓声を上げる、水風呂やサウナで名前を言い合いながら我慢比べをする、ジェットで 2 人入って「入らんといて」などと騒ぐ、水風呂へ入ろうかどうしようか躊躇している子を後ろから押して、「〇〇君、やめて」・・・それはそれは騒がしい。そして私たちが行った銭湯には水風呂に「氷」が入り込むようになっていて、これに子どもはくぎ付けになる。銭湯は子どもが騒げる要素満載の場所なのだ。子どもたちは、お風呂に入りながらその子どもらしさを十分発揮する。

掛かり湯はしなくてはいけない、タオルは浴槽につけない、銭湯内で走ってはいけない、騒いで他のお客さんの迷惑にならないようになどの一応の注意はして連れてい

くのだが、何が迷惑なのかは応用問題で、例えば水風呂に潜って上がってきて思い切り頭を振っている子は、その水しぶきが他のお客さんにかかっていることに気が付かない。この子は、水をかけられたおじさんに「誰や、わしに水をかけたヤツは」と言って水をかけられていた。

私と子どもたちが水風呂のところにいたら、「M 小学校の子どもは、静かにお風呂に入る」とわざわざ言いにきてくださった方もおられた。「そのとおりです」としか言いようがなかったが、この方も好意的に子どもたちを見てくださっているのが分かった。そして、子どもの行き過ぎをいさめる力がこの銭湯にはあった。多分、教師が連れてきているということが分かっているということもあってのことだと思う。

その銭湯に刺青を入れた方が入ってこられた。「先生、刺青や！」（ヤメテチョウダイ、オネガイヤカラ）という気持ちになった。まあ、正直と言えば正直である。しかし、小学校 4 年生ぐらいになれば、こういう発言が「ヤバい」ことぐらい直感的に分かっていると思う。それをあえて言うのだから、心配になる。「先生、あの人何したはんの？」ではないのである。「君なあ、人に指さされて、『何とかや！』と言われた人、いい気持ちするか？　よう考え」と言ったのだが。

銭湯を上がれば、飲み物が待っている。定番のコーヒー牛乳が待っていて、私が上がっていったら、宴たけなわであった。「先生、もう 1 本飲んでもいいか？」と聞く子がいた。「それは自分のおなかと相談し」と言った。「夕ご飯前やからやめとき」と言うべきだったなと後から思った。「やめといた方がいいで」と他の子が言っていた。

入湯料 150 円、飲み物代 120 円ぐらい。300 円弱で子どもたちは堪能して銭湯から帰った。

翌日の日記に何人もの子が銭湯のことを書いていた。

今、私のＨＰに掲示板はありませんが、この当時、感想の書き込みが楽しみでした。　氷の水風呂について、ハヤブサという人が「日記を拝見して大笑いさせていただきました。あそこのお風呂屋は子どもたちが喜びそうですものね。そして、水をかけたおじさんがいい味しています。そういう注意の仕方もあるのかと（笑）」。

かまきりりゅうじさんは「子どもと銭湯に喝采を」と書いてくれています。「かばのしっぽさん（僕はかばのしっぽというハンドルネームなのです）、子どもと銭湯に拍手喝采です。実は用があって、今、小砂丘忠義の『生活綴方の伝統』の中の『たくましき原始子ども』の項を書き写しているところなのです。それが、『子どもと銭湯』を読んでうれしくなって、それをやめてこの書き写しをしています。いつの頃からか言っている『子どもの内面に寄り添う』というのは、何をいまさらちょろいことをと苦々しく思ってまいりました。『子どもと銭湯』がそれを吹き飛ばしてくれています。かばのしっぽさん、うれしい限りです。子どもたちもうれしいことでしょう。拍手」。

このかまきりりゅうじさんというのは大阪綴方の会の野名龍二さんで、野名さんがこれを読んでくださったのです。小砂丘忠義の著書を挙げて、子どものことを認めてくれている。何かすごくうれしかったのです。何か子どもとの付き合い方、何もかもが失敗しているのではないかと心配していたので、励まして頂いてありがたかったのです。

おわりに　専門学校生も書きたがっている

ちょうど時間になったところで終わりたいと思うのですけれども、退職後、専門学校の学生さんに教える機会を与えていただきました。私の想像以上に皆さん真面目に授業を受けてくださり、面白がってくださいました。また機会があったらまた読んでいただけたらうれしいのですけれども、国語というのを初めて面白いと思ったというのですね。僕のやったことを楽しんでくれました。講義の感想を寄せてくれました。

ここからは、思うままに書かしてもらう。

この国語の授業を受けた感想を書きたい。

恥ずかしいことだが、最初あたりの授業で、私はよく泣いていた。泣きながら必死でバレないように抑えた。詩や作品の豊かな心に触れたこともあるが、みなのコメントに心動かされたことが大きかった。

他の人に、作品の何がわかるとたかをくくっていた。それが、みんなのコメントを読んで負けたと思った。しっかりと作品や表現を受け止めていた。つまり上から目線で見ていたのだ。

何よりも驚いたのは、みんながこれほど「思っていた」ことだった。私には見えていなかった。みんなも表に出すことはしていなかったと思う。

私は何を作っていたかというと、講義資料を作っていたのと、「国語通信」というのに前の時間に感想を書いてくれたものを載せていたのです。そしたら「この川柳が面白かった」「あれで笑った」「吉野弘さんのあの詩はとてもよかった」。そんなことが書いてあるのですが、そういうのを授業の初めにみんなで読んでいたわけです。その中で今読んだような感想を持ってくれていた。生活綴方のやり方というのはこの人たちにも通じるのだなということがとてもうれしかったのです。

それで、最後に何で成績をつけたかというと、エッセイを書いてもらってつけました。そのエッセイは、私にしか書けないということを見つけて、そのことをしっかり書く。書き方については、こんな書き方がありますといって、日本作文の会の系統的な指導を取り入れました。表現過程として、表現意欲喚起・取材・構想・記述・推敲・鑑賞という段階があること。文の書き方として、～しました、～しましたと書く展開的過去形表現、～です～ですと書く説明的概括的表現、現在形進行形表現があることを教えました。それで構成表を作らせ、文を構成して書くということを教えました。これはある程度大人になっていれば、理解できてやれるのです。これを教えることに意味があるなということを思いました。何でもかんでもそうしなければいけないということではありません。

その中で、自分にしか書けないことというのが一番大切なことです。書いてくれたものを三つほど載せてあるのですけれども、三つかな、四つかな。LGBT に関することを書いてこられたのが 26 ページのものです。2 番が「人間のゆえん」。それから 25 ページは電車の中でとても良い出会いがあったということ。27 ページに出てくるのは家庭崩壊で自分の夢がずたずたになって、お母さんを信じられなくなった。お姉ちゃんの手助けでやっとここの学校に来て、今、私は何とか頑張ろうとしているということが書いてあります。27 ペ

ージの「私の消えない痕」というのは、自傷行為がやめられない人です。27 ページの下の真ん中の辺に、「（最後に）先生にとっては気味の悪いものかもしれません。本当にすみません」と。別に謝ることは何もないのですけれども、こんなことを書いてこられました。よく書いてくれたなと思って、これはありがたいですね。でも、私がこれを受けとめられる人にならないといけない。この作品を読み合う時間がない。生活綴方は、やはり読み合う時間があると、みんなで考えられたら、励まし合いができるのですが。この自傷行為だけは放っておくわけにいかないので、このときの校長先生が川地先生のお知り合いで、私もちょっとしゃべらせてもらったことがあったので、その先生に相談しました。この人の相談にちょっと乗ってあげてほしいというお話をしました。そしたら担当の教官がすぐに話を聞きますと言ってくださいました。その後どうなったか私には分からないです。作品処理とよく言うのですけれども、どんな処理の仕方か。そこが綴方教師の真骨頂がためされるところだと思うのです。文集にして読むだけではなくて、そういった人をどのように励ましながら、どういう手立てがあるのかということを考えていくということが一番大事な教師の役割だと思っております。

長々と話をさせていただきまして、本当にありがとうございます。

質疑応答　概要

①書かない、書けない子どもへの指導について、②京都の到達度評価と生活綴方について、③小宮山氏が受けてきた教員養成とその後の実践について質問が出された。

（川地）　小宮山先生、ありがとうございます。もうあっという間の 3 時間で、追加の質問も受けられたらと思っていたのですが、いったんここで閉めさせていただきたいと思います。最後に、渡部昭男教授から、一言閉会のごあいさつを頂きたいと思います。よろしくお願いいたします。

閉会挨拶

（渡部）　小宮山先生、ご報告ありがとうございます。まだまだお伺いしたいなということで、本当に 3 時間があっという間に過ぎてしまいました。企画いただいた川地先生、それから共催いただいた京都大学 E.FORUM の皆さん、本当にありがとうございます。

ご参加いただいた皆さんに、少しこの近畿地区の研究活動についてご紹介したいと思います。日本教育学会近畿地区では、「三都物語」と称しまして、京都・大阪・神戸が主担当になって、毎年三つ以上の企画を提供しています。今回の企画は、学会の経費で運営されているということもあって、この後、報告をまとめまして、神戸大学のリポジトリ「Kernel」というものがありますが、こちらにアップされます。私どもが死んでしまった後も、リポジトリが続く限り、世界中、時空を超えて、場所を超えて発信されるものです。

今日お聞きしていて私は、今日の参加者の中に韓国の方が複数名おられます。韓国ではこのような実践はどのようになっていたのだろうということで、例えば今回のまとめを韓国語に訳してみて同時にアップしても面白いのではないか。または来年以降の企画の中にお隣の国・韓国でこういった綴方のような実践があると、交流してみると面白いのではないかというふうに思った次第です。

また、2006 年から「戦後教育実践に学ぶ」「私の教師生活」といった企画をシリーズで組んでおります。昨今のこのような時代状況にあって、今の時代が新たな戦前にならないようにという思いを強くした今日の企画でした。どうもありがとうございました。以上です。

（川地）　渡部先生、どうもありがとうございました。

皆さん、最後にもう一度、小宮山先生に大きな拍手をお送りして、この会を閉めたいと思います。ありがとうございました（拍手）。では、これにて閉会とさせていただきます。ご参加どうもありがとうございました。

共催：日本教育学会近畿地区（担当理事　川地亜弥子・渡部昭男）
京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センターE.FORUM

研究集会のご案内

日本教育学会近畿地区では、2006 年以来、「戦後教育実践に学ぶ」「私の教師生活」等の研究会を開催し、戦後教育実践について実践者の報告に基づき議論を深めて参りました。このたび、E.FORUM との共催で、下記の通り研究集会を開催します。対面・オンラインを併用します。ふるってご参加ください。

日　程： 2023 年 4 月 23 日（日）14:00-16:50（予定）

講演者： 小宮山　繁　氏

元京都市小学校教諭。日本作文の会元副委員長、近畿作文の会元会長、京都綴方の会元会長、京都市つづり方の会元事務局長等歴任。
単著に『ことば遊びアラカルト』小学館、2008 年。

会　場： ①対面会場　京都大学教育学部第 1 講義室
（京都大学吉田キャンパス総合研究2号館 1 階北側）【地図】
②オンライン会場　Zoom ミーティングルーム
ルーム情報はお申込み時にお知らせします。

お申込み： 下記の URL または、QR コードよりお申込みください。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSc2sBIRpLdrtNKzWQg8R-5SQPO2FOiXugFI-dcvn4AOs-aZvQ/viewform?usp=sf_link

※2023 年 4 月 20 日までに
参加申込をお願いします（先着 90 名まで）。

※対面会場は当日参加も可能ですが、
資料準備の都合上、お申込み頂けると大変助かります。

問い合わせ先：

神戸大学　川地亜弥子
lecture.kawaji(a)lion.kobe-u.ac.jp
※（a）を ＠（半角アットマーク）に置き換えて
送信して下さい。

私の教師生活――京都の綴方教師として――

講演者　小宮山　繁　氏

私の教師生活――子どもを寿(ことほ)ぐ教育学
ログとガチャをこえて

講　演　者：石本日和子氏

(相愛大学講師。元兵庫県小学校教諭。教育科学研究会副委員長等)

日　　時：2023 年 5 月 27 日(土)14:00-16:50

場　　所：神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 A427 室

（川地）　それでは、日本教育学会近畿地区の研究集会を開始します。司会を務めさせていただきます神戸大学准教授の川地亜弥子と申します。よろしくお願いします。今日は、兵庫県で長く小学校教師として地域の教育に関わってこられ、そして、民間研やさまざまな研究会で中心的な役割を果たしておられる石本先生に、「母校」の神戸大学でご自身の教育実践について語って頂きます。今日の研究集会には、神戸大学で教員を目指す人、他の地域で教育学に関わる人、教師を目指す人たちにも参加頂いています。最初に一言ずつ自己紹介をして頂いて、石本先生にご講演頂き、その後に質疑応答の時間をとります。

では、石本先生、どうぞよろしくお願いします。

（参加者自己紹介　略）

私の教師生活――子どもを寿（ことほ）ぐ教育学　ログとガチャをこえて

講演者：　石本　日和子

1.　はじめに

神戸大学の教育学部の時の学生でした。ふまじめな学生で、体育会水泳部でしたので、なかなか教育学部までは上がってこずに、六甲台のあの汚い緑色のプールで泳いでいました。父が、お前を夜間の大学にやった覚えはないと怒るような学生でしたので、真面目なみなさんにお話しできるようなことがあるかなあと思っているんですが、頑張ってやってみようと思います。

子どもを寿ぐ（ことほぐ）っていうことについてお話します。いきなり結論から行きますが、私はこの言葉に行き着いたというか、コロナの時に、全面的に子どもを承認する、すげえなあって思わないと、やっぱり教師じゃないんじゃないか、そういうふうに思うようになったというか、思えるようにしてもらったっていうか…。子どもと、保護者と、それから研究者の先生たちに支えられて、そう思えるようになったっていう話をしたいと思います。今日は、ちょうど最後 3 月がコロナでなくなっちゃった 2019 年度の実践をお話しします。

最初に自己紹介がわりに、どういう教師だったかについてお話します。

私が神戸大学に入ったときは、相当変な人じゃないと教採には落ちない、と言われてたんですが、2 年生になった時に、いやちょっと滑る人がいるらしいよと聞こえ始め、3 年になったときは、半分くらいやばいらしいよという話になり、4 年生になると、いやーあんたは難しいだろというような変化がありました。今までたくさんごーっと採用されていたのがぎゅーって絞られたんです。西宮は 50 万都市なんですが、私の前々年度くらいまでは 100 人規模で新任の採用があったのが、私の時は 11 人でした。もう、ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅーって感じで絞られて。

こんなこと言ったら怒られるのかもしれないけど、本当に何にもできないような私でした。斎藤浩志先生という教育学の先生に教えていただいて――と言ったら「君は教えていただいてっていうほど学んだのか」ってあの世からお叱りが聞こえるようですが――斎藤

先生や土屋先生にお世話になりながら、すごく生意気な学生で、教育学なのだ私は、なんて思っていました。ですので、小学校の教師になる？なっちゃう？みたいな感じでした。

もっと自己開示すると、大好きな彼がいて、その彼と結婚して東京に行こうと思ってたものですから、教採はまあいいかという感じでやっていたのですが、体育会水泳部ということがヒットした（よかった）みたいで受かっちゃいまして、それで、教師になったっていう、ほんとにとんでもない新任でした。

資料にも書きましたが、わきまえない、可愛げのない、授業のできない、生意気な新任で、「あたしはお茶なんか入れません！」とか、職員会議で訳もわからず「はーい！！」みたいに言ってる新任だったので、校長には直接呼び出されました。今だったらパワハラなんですが、「君は教師に向いてない」って散々言われました。当時はバブルのちょっと前でしたから、長い髪で、ミニスカート履いて学校に行って、もうやめた方がいいんじゃないかとみんなも言い、自分でもちょっと内心で、向いてないんじゃないかなあ、と思ってました。

最初は 4 年生を持ったんですけど、3 年生の学級がそのまま持ち上がりになった 4 年生で、1 番持ちやすいクラスだって言われてたんです。それこそ、3 年生のときの先生は大変きちんとしてらした先生で、クラスはできてるから、あなたが行ったらもう子どもがしてくれるからねっていうようなクラスだったんです。

ところが、私みたいな権威のない、授業もできない教師が入ったら、秩序立って運営してる子どもたちから見ると、秩序を乱すっていうか、なんだあの教師は、となって、一人も言うことを聞かない。情けなくて。「前の先生はそんなことしてない」、「先生の話全然わかんない」、「もう学校が嫌になった」とか、わーって言われて。また私も生意気だから、前の先生は漢字ドリルを忘れたら練習帳を 3 ページ書く、とかやっていたのですが、「そんなのおかしいからもうやめ！」って言ったら、子どもたちが「うわーもう宿題やらんでいいんや、ヒェーラッキーラッキー！」とかみんなで騒ぐというような状況でですね、泣いて泣いて。学校の用務員さんに出てくださいって言われるまで黒板の前で授業の練習をするんだけど、練習をすればするほど自分の出来なさに絶望するような状況でした。

ぐっちゃぐちゃだから、もう校長もやめてもらったら一番良かったんだろうけど、困り果て、職場の先生たちも困り果て、「もう石本さんさあ、遊んだらどう？」って話をしてくれて。それで、武庫川が近くにあるんですけど、武庫川に子どもたちと遊びに行きました。ダンボールを持っていって、ソリでガーって滑って。それがもうめっちゃ楽しくて、初めて小学校の教師になって笑いました。私が一番楽しかったのね。そしたらその行き帰りにね、今でも忘れないけど、あやちゃんっていう子が私の手をそっとに握ってくれてね、「先生、先生はなあ、あかんタレやろ、でもな、あやはな、先生がな、机のとこまで来てな、ここやでって言うてくれたらわかるの。だからあやは、前の先生より、石本先生の方が好き！」って言ってくれて。ああ、もう私は全然ダメダメで、生徒指導もできない、授業もできない、だけど、この子と手を繋ぐことはできるから、この子と手を繋ぐことのできる自分として生きていこう、みたいに思ったんです。それが最初です。あのとき、あやちゃんとか、そういう子どもたちが救ってくれなかったらきっとやめてたと思うんです。だけど、あのときのあやちゃんの手の温もりが、私を支えてくれたなあって思ってます。

そう言いながら2年教師をやってすぐ結婚しました。あの、結婚したのはさっき言ってた好きな人じゃなくてね。「あれー？　おかしいな、東京行くはずだったのに」、と思って、振られちゃって。失恋の痛みでですね、これはどうしようと思って、神戸大学の六甲台の食堂で、「あたし振られちゃったんだけどさあ、誰かあたしと結婚してくれる人いないかな」と言ったら、うちの夫が「はい」って言ったから、「ほんとに結婚する！？」って言ったら「はい」って言って。今でも愛のない夫婦なんですけど。いや、色んな夫婦があるからね、愛し合って結婚するのが一番いいと思うんですけど。愛はないんです、でも信頼はあるから。みんなは、いつ別れるのかなって私のことを心配してたけど、二人で年老いています。

結婚して、出産育休で自分の子どもを持って、何にもできなかったんだけど…。とにかくできることは（学級で）絵本を毎日よみきかせることと、学級通信を作ることと、そして、遊ぶこと。それから体育同志会とか、学力研って今でもあると思いますが――私教育学だったので、黒板の書き方なんていうのも分からなかったから――学力研の先生に基礎を教えてもらったり、全生研で生活指導を教えてもらったりしながら、だんだん教師になっていった、という感じです。

30代は、資料にも書きましたが、私にとっては非常に職場や教育が曲がってきた時期でした。兵庫県で言うと、県の知事部局に、兵庫県人づくり懇話会っていうのができて、５泊6日の自然学校っていうのを発表したんですね。これは、誰か研究してほしいと思うくらい、衝撃的でした。ちょっと今は感覚違うかもしれないけど、新聞に学校の教育課程の内容が発表されたということについて、校長以下みんな、市の教育委員長も怒った、そのくらいの衝撃でした。「なんで知事部局が勝手に自然学校４泊5日って決めるんだ」って。その中に、連合兵庫教組の石井委員長っていう人が座長として入っていて。教育課程の編成権を政治に取り上げられたような気が、私はしました。「えっ、子どもにどういう教育をするかっていうのを新聞発表で知るの？」ということで、西宮は大混乱をして。最後まで５泊6日の自然学校に行かないって頑張った学校もありました。その時に組合も分裂して、これも色々立場があるので乱暴には言えないんですが、簡単に言うと、教組が教え子を戦場に送らないというようなことを、一旦下げるみたいな話になりました。私は全教西宮に所属することになりました。それはどうしてかって言うと、この自然学校の発表があったときに、おかしいじゃないかって職員室中は思ってるのに、そのことを親に言ったらだめだって言われたんです。それは校長も言ったけど、組合も言ったわけ。勝手に「おかしい教育なんですよ」って言ったら親がびっくりするから、言ったらいけないと。職員会議でやるのはいいけど、親におかしいでしょって言ったらだめだと。それで、そんな簡単には私は折れませんって言って、出て、全教っていうところに行って、全教は父母と一緒に教育を作るんだというふうに言ってくれたので、そこで自由にはなったんだけど。教育って一体なんなんだろうって思って、そこに書いてある市民活動みたいなことをやりました。これはなかなか、面白くって。

で、そうやって暴れてるうちにですね、阪神淡路大震災が起こりました。この阪神淡路大震災の前の年に愛知いじめ自殺事件が起こって、子どもはダメだとか、教師はダメだって言われてたんだけど、地震が来て地が裂けたら、実に子どもたちはよく働いたし、教師たちは地域住民を守って頑張った。ここにまだ素敵な人たちがいるっていう…、エンパワ

ーっていうんですかね、今の言葉で言えば。エンパワーしなきゃいけないっていうことで『輝く笑顔再び』っていうような本を出したりもしました。

でもほんとに人は死ぬんだなっていうか…。昨日まで一緒にやっていた子どもが、瓦礫の下に埋まってしまうというような…。私はこの時は樋ノ口小学校というところに勤めてたんですが、子どもが 5 人死んだんですね。かわいそうにねえ…生きたかったやろう、と今でも胸が痛むんですけど。あの子とちゃんと笑えてたかな…と。あの子にちゃんと算数教えられたかなとかそういうことは思わない。あの子とちゃんと笑えてたかなとか、あの子学校楽しいって思ってたんかなとか、いうことを最初に思った時でした。

でもその時はまだ知見もなかったから、私たちに。だから、子どもってこんなすごいんだよ！頑張るんだよ！見て！っていう、そういう感じね。その時のそのうずめられてた中でなんかこう、なんていうのかな、屈辱感とか恥辱感とかそんなの全然思わなくって、すごいでしょ？子どもってすごいでしょ？っていう元気な時代で、そんなことをやりました。

で、阪神淡路大震災で、もう全然ガンガンにダメになっちゃって、教育課程をどう編成するか、みたいなことも現場にガーっておりてきて、今までは県で決めてたのにいきなりバーっておりてきた。それで、今でも覚えてますが、ストーブを囲みながら、「なぁ、あしたどないする？」「どないする？　いや、子どもらまだしんどいやろなあ。明日とりあえず遊ぼか」「な、明日はみんなで遊んで、生きてる命を大切にして…」「なあ、亡くなった子かわいそうやったなあ、とか、しみじみ思えるようなことせなあかんなあ」、みたいなことで。今までは、教育課程の自主編成、とか言うと、めっちゃ賢い人が、きちんとしながらするもんやと思ってたんですが、私らできるやん、と思いました。子どもと一緒に生きるっていうことが、その狭い教育課程じゃなくて、大きな教育課程なんや、という話で、辛い体験だったけど元気になる体験だった、というようなことを考えていました。

一番元気な時ですよね、30 代後半から 40 代の元気な時で。樋ノ口小学校から、西宮の南の一番端の、どーんと突いたら海に落ちるっていう貧困な小学校に行きました。ポテチとコーラと下ネタ、で生きてる子どもたちなのね。最初 5 年生を持ったんかな。「みなさん、新しく担任になった石本です。よろしくね」って言ったら一番前の男の子が、あの子も必死やったと思うけど、「先生、ブラジャー何カップ？」って。もう必死なんだよ、向こうも。なんかこうちょっとやってやらなきゃいけないから。「え？ブラジャー何カップってあんた知りたいの？」「知りたい。何？何？」っていうから、「わかりました。ここでみなさんの前で言うのは個人情報ですから、ちょっと言えませんが、本当に知りたかったら後で二人で話しましょう。来てくださいますか？何時から来ますか？」って言ったら、「もうええ」って。「いや、私は言いたいで？あなたに。でもみんなの前で言ったらそれはいけないやろ？」って、そんなことがあって。小学校からタバコ吸ってるとか、フードを被って学校に来て、片腕伸ばして突っ伏して寝て、時々顔を上げてなんかいらんことをばっと言う、っていう、そういう人たちでした。地域からもむちゃくちゃ言われるし、学校の教師もむちゃくちゃ言うし、親もむちゃくちゃ言うみたいなとこだったんです。でもお母さんが、「いやでもね、先生あの子らの生活ってね、工場地帯なんですよね。夜操業すると（注電気代が安いので夜操業する）、そこに働きに行くの、時給がいいから。で夜いないんだよね、お母さんとかが。まあお父さんでもいいんだけど。で 1 年生の子が夜一人で寝てる」って言う。寝てるんだけど、ほんとに寝れてんのかなっていうような状況で、朝お母さん

帰ってきて、昼 2 時か 3 時ごろまで寝て、子どもらが帰ってきたら、お母さんがタバコをばーっとふかしながら、「だるいわー」とか言う。ご飯はしてくれるんだけど。

そういう生活の中で、ほんとにあの子たち、遊べてるんかなあ、みたいな話になり、子どもを責めるばっかりじゃなくて育ててやんなきゃいけないみたいなことを言ってくれるお母さんがいて、「親たま」っていう学習会をやりました。これは面白かった。団地から見下ろされてるような小学校だったんだけど、団地の全ての公園をプレイパークっていうのにして、1 日何してもいいから遊び回ろう、みたいなことをしたの。そしたら、今まで小学生のくせに下ネタ言う、タバコ吸うみたいな子が、最初関心なさそうにしてるんだけど、「え？泥？　触ったことないから触れへん」とか。「いや、あんたへタレやなあ」「正体見えたで、あんた」みたいな。水をびゃってかけたら「うわあぁぁ」とか言うから、「水びゃってやられたら怖いん。もっとやったろ」みたいな。そうするとなんか、かわいそうに、こう言う感覚も知らずに生きてきたのか、みたいなことがあって。

その時、3 代目の校長だったんですけど、校長がよかったんだよね。「やりましょう」っていう話になって、一日中遊び倒すっていう日を作ったんです。学校でね。運動場に穴掘ってもよくて、水撒いてもいいとか言って。バスケットゴールあるでしょ、バスケットのゴールとゴールの間を綱で結んでね、人間をこう滑らすみたいなのをやりたいって言うから、よしやろうって言ってやったりしたら、違う顔が見える。子どもって、関係性の中で生きてるから、学校の教師が「勉強しろ」って迫ると、「だるいわー」とか言うんだけど、「え、そうなの？　ここ穴掘りたいの？　一緒に掘ろうよ」って言うと、いや、「俺はちょっとあんまり、穴掘るの得意ちゃうから、お前掘ったら俺もちょっとやる」みたいな。いざ、ぎゃーって飛ぶってなったら、意外に怖がりやったり、そんなことがありました。

大工さんのお父さんが、たくさん板とか釘とか持ってきてくれて、一生懸命お家を作ってくれて、「先生なー、うちのはな、ほんま全然勉強もできひんしな、学校来たら怒られるばっかしやし、俺も忙しいから学校なんか嫌やってんけど、今日は楽しいわー。先生、こんなんやったら俺なんぼでも来たるわ」って言ってくれて。「ああ、学校っていうのは、賢い人は来たくなるけど、賢くないっていうか、なんかある種の制度っていうか、そういうとこなんやなあ」とか、「ああ、あの家に居られへん子こそ学校でさ、楽しくしてほしいやんかあ」みたいな話がだんだん学校でできるようになって。そうそう、味噌汁隊って書いてますけど、味噌汁隊って大したことないんですよ。お湯を沸かすことを教え、そして、その当時はカップ味噌汁はなかったけど、生味噌となんかを入れたらお味噌汁になるっていうのを教えて。それを家庭科の先生が、「いや石本さん、出汁を取るとか教えなくていいの？」とか。「いや、出汁取るなんて出来ひん。あの、ポテチとコーラよりは、お味噌汁とおにぎりの方がええで。味噌汁はあの生味噌買ってきてこうやって湯注いだら味噌汁なるやろ？　美味しいやろ？　って教えてやることからやろうや」みたいなこととか、簡単なご飯の炊き方を、教えたりしました。

広島の平和学習とか、性教育とかも。小学校の女の子をトイレに閉じ込めるみたいな事件が起こったりね、なかなか表沙汰には出来ないような事件がたくさん起こり続けるんですが、私も若くて元気だったし、みんなと一緒に、そういう子たちに響く学びっていうのを考えようよ、と一生懸命やりました。もちろん、国語とかも頑張りましたけど、そういうのをたくさん模索しました。

ただ、教育はどんどんどんどん曲がり始め、西宮は総合選抜制度っていうのがずーっと残ってたんですけど、地域の中学校から地域の高校に行く、私それで高校に行ったので、高校の受験勉強をしてなかったんですよね、高校ってランクがあるでしょ、でも西宮はほとんどなかったから、みんな名門高校だと思ってたのに、そういう制度が崩されたりとか。それから学区が拡大していったり、いろんなことがあって。それもいろんなところで出会ったお母さんたちと暴れまわってたんですけど、ことごとく討ち死に、うまくいかず。そして最後は教育基本法を活かす西宮市民の会っていうね、もうほんとに連日頑張ったんですが――資料にも「睡眠時間 3 時間が続く」って書いてありますけど――ほんとになんかこう、自分ではここで頑張らなかったらいつ頑張るっていう状態になっていったんですが、47 年教育基本法も変わってしまいました。

なんか、何やってるんやろ私、みたいなときに、この学校から西宮の中心の学校に移って、非常に攻撃的な男の子に会いました。お前なんか教師として認めへんぞ、みたいな。いろんなこと浴びせられたこともあったし、長年の疲れも溜まってたんだと思うんですが、立てなくなって。学校に行こうと思うと涙が流れて立てなくなって、それでうちの夫が、ちょっとおかしいで、休んだらええんちゃうん（いいんじゃない）って言って、半年間学校を休んで療養しました。よう半年で済んだなあって思うんですけど、辛かったです。鬱状態になってくると、幅もよくわからなくなって、がーんってぶつかったり、動悸がしたりとか、眠れないとか、そんなことがありました。で、新任の頃とは違う、深刻なあかんかもしれへん状態になったんですけど、考えてみたら私の苦しさっていうのは子どもの苦しさでもあるかもしれへんし、今まで割と正義の立場からというか、そういうの好きなんですけど、今でも好きなんですけど、そうじゃなくて本当に子どもの傍らでちゃんとした教師にならなあかんって思って、武庫川大学の大学院で田中孝彦先生のところについて、ハーマンを勉強したりとかしました。これも勉強したとか言ったらまた田中先生に、「僕はそんなふうに勉強したと言われるほど君が真面目にやったとは思えない」とか言われるかもしれませんが、一応頑張りました。

この辺りから、もちろん制度的なことは大事だし、私の立場で言うと、戦わなければいけない、怒らなければいけないって思うけれど、子どもと一緒に、子どもの声を聞きながら、どう生きていくかっていうことを考えるということが、一番政治的な行為ではないのか、というようなことをちょっと思い直して、子どもといることが、苦しいんだけど楽しい、楽しいんだけど苦しい、そういう感じになってきました。コロナ禍で、西宮の教育を考える市民の会っていうのを作って、教育に関して子どもたちを豊かに育てるっていうことに関しては、いろんな政党の右から左までの人たちと手をつなげるんじゃないか、みたいな教育マニフェストを作ったりもしました。基本的には、子どもたちの声を聞くことが政治的である、と自分の中に据わったのがやっと 50 代後半ですね。だからずいぶん普通のことをわかるのに何年かかってんねんあんた、って言われたりするんじゃないかと思ったりします。

2. ログとガチャに閉じ込められる子どもたち

今の子供たちは、ログとガチャに閉じ込められてると思っていて。ここはもう皆さんの方が色々詳しいと思うのですけど…。記録された自己の履歴を背負わされて生きるという

か、極端に言うと、学校によるデジタルタトゥーを入れられてるんじゃないかって思うほどです。ガーゲンの欠陥言説じゃないけど、問題を個人の内面の機能不全にすることで、具体的な関係や文脈から切り離して、成功した子ども、成功した親、成功・失敗した教師っていう風に、記録してしまうという。自分自身も、評価されるということを内面化してしまうことがあるんじゃないか、と思うんです。それから、ガチャっていうのは、安倍元総理のテロ行為を行ったあの宗教 2 世の問題なんかもありますが、もうそういうところに生まれ落ちてしまったらそこで生きなきゃしょうがないみたいな、とても狭い穴の中に嵌ってしまっているような感じがあるんじゃないかと思って。そうすると、子どもの 1 番近いところで、「いやそうじゃなくてさ、あんたの、その、しょうもないし、わけわからんし、あかんたれやし、何やってもなんか、悪いけど、ビリばっかりつけなあかんけど、それが面白いやん」っていうか、少なくとも「私はあんたが好きやで」みたいに言える教師でないと生きられないというか、そこからやっぱり変えないとダメなんじゃないかみたいに、思ったわけです。

3. 実践の紹介　4 年生で荒れた子どもたちと

その次です。実践なんですが、2019 年度ですよね。この学年は 5 年生で、私たちの挑戦って書いています。私ね、3 月の 25 日から 31 日くらいまで非常に評価の高い教師でございまして（笑）。いつもはね、言うこと聞かへんとか、こんなん言ってとか、校長に思われてるんですが、3 月 25 日になった途端に、校長先生が「石本さん、時間はあるかな」と言って、校長室の扉をパタンと閉め、「悪いねんけど、何年生思ってくれへんか」と。「え、私でいいんですか。だって私、人事評価制度も最低だし、校長先生に怒られてばっかりだし、自信ないなとか言うんですけど」「いや、頼む」。頼む頼むと言われて、大体荒れ果てたクラスを持たされるわけですよ。そしてここが私の弱点なんですけど、「いっちょやったろか」っていうか、「ダメです」って言ってそのまま（引き受けないまま）だったら、うまく生きていけるのに、「しゃあないな、ちょっとかましとこうか」みたいな性質で。いつもツボにはまるんですが、そういう（そうやって頼まれた）子どもたちでした。

小学校 1 年生の時は、校門で泣き叫び、怪我が多発しました。どの程度かと言うと、一休さんみたいにこうやって拭き掃除するでしょ。 そうやって拭き掃除せえって言ったらね、こうやって拭き掃除してた時に、ガーンって顔を打ってね、歯から血が出たとか、それから、雲梯させたら、途中でパッと手を離して脳震盪を起こしたとかね、もう大変っていう話になったんです。学校はどうしたかっていうと、何にもできひんような奴らを締めなあかんっていう話になって、小学校 2 年生の時は厳しい管理でルールを守らせた。管理が行き過ぎている先生が担任になって、不登校が増加したんだけど、静かで、落ち着いた状況にはなった。そうすると、3 年生も、その路線で行く。ところが、そろそろ保護者たちから、それではいややみたいな反発が起こり、非常に極端なその方が体罰問題を起こして、担任が総入れ替えになるみたいなことがあったんですね。4 年生は、そこまで行ったら指導が失敗したっていいということで、優しい指導に戻そうとなった。だけど、2 年生、3 年生と、厳しい指導で、ぎゅって締められてた子供たちが、ゆるってなっちゃったから、ひどい荒れに陥って、いじめ事件が頻発するみたいなことがありました。この子らが 4 年生の時は、私は 6 年生を持っていました。生徒指導の先生から 4 年生がエラいことになって

るから、見に行ってやってくれ、とか言われたんだけど、6 年生も大変だったから、全然この学年のことがわからなかったんだけど、5 年生で担任することになりました。

4 月は、石本ですって言ったら、もう長い間、瓦木小学校にいるから、えー石本先生やとか言ってくれる子が大体何人かいるねんけど、この学年は、担任発表の時「5 年 1 組の石本先生です」と言われて「はーい」って言ったら、子どもたちが下向くわけ。誰も見てくれない。これは、えらいことになってきたな、もう、それぞれがカプセルに入って、傷つかないようにしていると感じました。「皆さんこんにちは」って言っても通用しない。「皆さん」がいないから。だから、「おはよう」「おはよ」「おはよう」「おはよう」「おはよう」「あ、おはよう」っていう感じで、もう 1 人 1 人おはようって言わないと授業にならないという状況でした。もうしょうがない。1 人 1 人から始めようと思って。それで、「先生、学級の係を作るんですか」ときかれても「いや、作りません。やりたい人がやったらいいんじゃないですか」と答え、「え。そんなんでいいんですか」「いいよ、 やりたいようにやりゃいいじゃんか。係なんてなくても大丈夫だよ。それよりさ、なんかやりたいことがあったら、先生に言って、それ係にするから」みたいなことから始めました。

克という子の話をします。この子は、4 年生の時の荒れの中心です。資料には、純っていう子もいるでしょ。4 年生で激しいいじめを受けて、母は外国籍で。克は、その純を始めとして他の子に暴力を振るいまくった子です。この学年は荒れた子がクラスに 3 人いました。克が武闘派、とにかく暴力。それからおちゃらけ。それから、6 年生のとき知的に高い颯汰っていうのを持つんですけど、この 3 人で荒らし回る。その暴力の中心にいた克を持つことになりました。

4. 最初の授業参観は川柳で自己紹介

最初の参観日が迫ってきていて、一人一人の佇まいを表現できるような授業にしたいと思いました。だけど、子どもたちの“閉じられた”体では、まだ文章を綴ること、読み取りが難しいと思って、自己紹介川柳を作ることにしました。この時は、まだ文章を言う、なんてできひんから、「好きなこと何？」とか言って、カードに書かせて、「ゲームが好きです」とか、「鉄道が好きです」とか言って、それで川柳にしたんですね。「石本日和子です。ロックが好きです。『こう見えて　ロック好きだよ　ドンドンパッ』」とかいうようなの。「青空にカキンと響くホームラン」（将来の夢はプロ野球選手です）、「桜より桜餅が大好きだ」とか、 「喧嘩買う わかっているんだ悪い癖」とか、「喧嘩売る わかっているんだ悪い癖」とか。そんなふうな川柳をして、保護者から笑いと拍手が何度も起こって、「５年生　ここが勝負だ頑張るぞ」っていうのは私学受験目指してる…、みたいなのがあって。保護者の皆さんもなんとかしないといけないっていう風に心配してらっしゃるので、随分応援してくれるような参観日になったんです。

その中で純は、「頑張って毎日来るぞ学校に」。純はいじめ倒されてるから、怖くてもう学校に来れなかったんですね。学校もひどいんだよ、一番いじめてた克と一番いじめられてた純を一緒のクラスにした。学校は何考えてんだろうって思いました、見えてないっていうか。で、純のところは、お母さんが外国籍の方で、学校にもの言えないんだよ。純のお母さんもね、日本の学校ってよくわかんないから、そしてどう言ったらいいかわかんないから。心配はしてらっしゃるの、いいお母さんでね、優しくて。でも、お母さんは、学

校は嫌でも行かなきゃいけないって割と純粋に思ってらして。他のお母さんとのコミュニケーションがないから、学校に言いに行くみたいなこともできなくて。純は可愛い子でね、「今年は僕はいじめられないと思う。頑張る」なんて単純に言ってしまうんだけど、でもそうやって、みんながカプセルに入って何も言いませんって言ってる時に、一番先に純が、「先生、僕頑張る」って言ってくれたのが嬉しくて。「頑張ろうな純」っていう風なことでした。

で、一番ひどい克は、「サクラサク　僕が小学5年生」（今年は頑張ります）って。もう何を頑張るねんとか、頑張ってまたいじめるんかとか、形式的なことだけ言うなとか思ったんですけど、頑張ってね、と。提出に来た時に、いい川柳だねと言って。克「参観日用です。4月と言えば桜ですから」私「あっそう」と。で、授業参観で発表する時は前に出なくて隅っこの方でボソボソって。克が授業参観で発表する時はね、教室はシーンとするのね、あいつやあいつやって。保護者もわかってるからね。純のことは応援したいと思うから純がなんか言ったらみんなニコニコってするんだけど、克がなんか言ったらいや…っていう感じがあったりしました。克の腰巾着の遼ってのもいるんですが…。そんなスタートでした。

学級全体が本当にカッチカチから、保護者の皆さんも応援してくれて、少し緩んだかな、というような手応えのあるスタートを切りました。

5.　正解だけで終わらせない授業を

道徳です。とにかく5年生の授業、手応えがないっていうかね。みんなもう自分の意見を言うのが怖いから、めっちゃ早く、すっすすっすっと行くわけ。誰も、「聞いて聞いて、私こう思うねん」って言わへんから、もう、たたた、たたたた、と終わって、しょうがないから歌おうかとか。これは典型的な教材で、「休み時間にソフトバレーボールをしていた時のこと。相手チームから返ってきたボールが、私たちのチームのコートの中にラインギリギリで落ちるのが見えた。ところが、同じチームのみんなは『ボールがラインから外に出ていた』と主張した。コートの中にはっきり入っているのを見たのは私だけのようだ。もちろん、相手チームの人たちは『コートの中に入っていた』と主張した。『そんなことないよ。絶対ラインから出てたよね。みんな』ってナナミが言うと、みんなも『うん、出ていたよ』と口々に言った。私は、ボールはコートの中に入っていたと言うべきかどうか迷っている。私はどうして迷っているのでしょう。あなたが私だったらどうしますか」って。しょうもない教材なんですけど。葛藤教材、モヤモヤしなきゃいけない素材なわけで。私がそうやって読んで、さあ、「私」だったらどうしますか、って言ったら、克がはいって手あげて、「『私』はチームが損するから黙っていると思います。でも、嘘はいけないので、僕だったら正直に言います。」って言うんです。そうだよねって言って、みんなはどうですか、って言うと、終わってるからね、もうそれで。誰も発言しないんです。

で、困ってしまって、いや、でもさ、ちょっと教科書読んでみよか、って言って。「このような出来事で、僕や私が友達とのやり取りの中で迷ったり悩んだりしています。皆さんは、どうすればいいのかがわかっていても、その通りに行動できなかった経験がありませんか。わかっていてもできない自分を見つめ、どうしてできないのか考えましょう」って書いてあるんだよねって言って、だからさ、一言でさ、終わったらいけないんじゃないか。

この教材は克の言うのは正解だけど、どうだろう。こう言ったらさ、また克が「わかっていてもできないのは、弱いからです。強い心を持って、弱い自分に打ち勝てばいいと思います。正しいことをするには勇気がいりますが、心を鍛えればいいと思います。」って言う。へえ、克ってすごいね…。で、10 分なんです。あと 35 分あるでしょ。どうするよっていう話で。

だけど、いじめの人間関係の中で、学校の雰囲気に照らして方向付けられてきてね。学級の雰囲気の中心の 1 人が克で、それに評価され、管理されてきて、本当に言いたいことではなく、うまく雰囲気にはまることが大切だったから、克が正解を言ってるのに、えーとか言われへんっていう。

それで、「わかった。道徳の教科書の正解は克だ。さすが。でもさ、悪いけどさ、この教材は悩んでほしいんだよね。道徳の教科書だと、心を鍛えればいいよねって思うけど、心を鍛えたいけど、ちょっと無理っていうストーリーに変えてみようか」って言ったんです。苦し紛れです。なんでもいいからさ、どうストーリーを変えれば正解がちょっと変わってくるかなとか言ったらさ、あの、輝っていう子が――可愛いくて、給食をよく食べる子なんですけど――「休み時間のソフトバレーボールの試合ってええな。俺らドッジしかできひん。休み時間長いんかな」とか。他の子は「そんな話誰もしてへんやん。は？」とかって言ったんだけど、でもとにかく、わけのわからん輝が言うことが大事なわけ。輝、いいねって。そしたらさ、また遼ちゃんが、「どんだけ運動場広いんやろ。ネット貼ってあんのかな。コートないと線引きだけで終わる」とかいうんですね。そういうことが大事。書いてないことを言うのが大事、ナイス、とか言って。かっちゃんが――賢い子なんですけど――「審判がいないから揉めるんですよね。審判がいたら揉めないです」って言うから、私が「あのね、かっちゃん悪いけどね、今、揉めてほしいから、揉めない設定はやめて、揉める方向でなんとか考えてほしい」って言ったら、「あ、それなら、実は審判がいたんだけど、気が弱くて頼りにならないってことにすれば、揉めるんじゃないですか」とか言ったら、私がそうそうそう、そうだよ、揉めよう揉めようとか言って。そうすると、非常に賢い、ゆいちゃんっていうのが、「ナナミがキーパーソンですよって。ナナミが言うと、みんなが従ったんだから、ナナミのキャラ立てがいるんじゃないですか」って。それで、「わかった、みんなが文句を言えないキャラってどんなキャラだ」っていう話になりました。

そうするとね、今までこう無関心で寝てる（ふりをしてた）人たちが起き上がって、「文句を言ったら切れるようなキャラを言っていいんですか」みたいな感じで。「いいよ。道徳の話だからさ。これはやった方がいい」とか言って。「ナナミが執念深い性格だったら言えない」「勝負に異様にこだわる人だったら言えない」「家来を飼ってる人だったら言えない」「陰で悪口を言う人だったら言えない」っていうんですね。で、「ナナミって嫌なやつやなー」って。「いや、ナナミは嫌なキャラなんだけど、『いや』って思ってることがバレたら外されるから、友達を装って付き合わないとダメなんですよ。権力持ってるっていうか、支配するキャラ」とか言うんですね。そしたらこったんっていうのが、「要するにさ、チームの中で身分制度があったらアウトだよね。」とか言って、「身分制度って何？」とかいう話になって、「言いたいことを言える人は身分が高い、言えない人は身分が低い」、「ルールを味方にできる人は高いけど、ルールで弾かれちゃう人は低い」、「先生も恐れさせる人は身分が高い、先生から常にうんざりされている人は身分が低い」っていう話がだーっと出

てくるんです。で、それを全部黒板って書くの。嫌なやつだねーと。みんな克のこと言ってんだよ、嫌なやつだねとか言いながら、ガーって黒板に書くわけ。でも、克のことじゃないからね、ナナミの話だから。ガーって書くの。

そうすると教室が熱を帯びてきて、普通になって、いじめがかわいそうじゃなくなるっていう話っていうか、空気っていうか、日常っていうか…。つまり、その中を私たちは生きてきたんだよ、みたいな話がガーって出てきて、この子たちがすでに身分や序列を感じて生きて、非常に的確に描写していくことに、胸が本当に痛みました。でも、その時子供たちはすごく楽しそうで、そうそう、もっとこういうことを付け加えるといいよ、とかさ、まさに 4 年生の時の教室を彷彿とさせるようなことが出てくるんですね。だけど、言えなかったものを何かしら表現してるっていうのが、心地いいような雰囲気にガーっとなってくる。

そうすると、宮っちていうのが、「あのさ、みんなは言えないって言うけどさ、僕は言わないって感じ」って言い出して。彼は荒れの中でも 1 人で前を向いて勉強していたっていう子なんだけど、「言えないっていうのは言いたいけどできないって感じだけど、言わないのは、言いたくない。知らないことにしたんだ。言ったって変わらないし、誰に言ったからいいかわかんないし、コートにボールが入ったとか入らないとか、そんな小さなことどうでもいい」。小さなことであんたら散々揉めてさ、入ってたとか入ってないとか。

実際、4 年生の時、克が、「入ってたやろ、出たって言うやつ誰やねん、土下座せえよ」とか言ってさ、土下座さしてさ、頭をこう踏むみたいな事件が起こったんだよ。だけど、こういうことを宮っちが言う。そこは問題じゃないとか言うんだよね。それで、どうでもいいとかで終わらせたくないけど、緊張した静かさが教室に流れて、さっきまでワーってなってたのが、ひゅーってなって。そうだねって、ナナミの話ができて面白かったねって。教科書を超える物語が作れるってすごいよ、って言って終わりにしました。この時はまだ、言えないのではない、言わないことを選択したっていう人が、言わない選択をしたことが何をもたらしたっていう風に考えてるのかな、とか、それは小さなことだったのか、とか、私の中では問いたい思いがわーって出るんだけど、我慢して。黒板見ながら、よくみんな言ったよね、本当にナナミって嫌な人だね、とか言って終わったのです。克は最初の 10 分間の正解を言い終わると、机の手を投げ出して寝ていました。

6. 作文を書こども、読みあう学級

なんやかんや言いながら学級が少しずつほぐれてきました。学級通信は書いてましたし、純がこんな日記を書きました。

僕の友達。僕の友達は武とマルちゃんです。友達になった理由をクイズにしてみました。①2 年生の頃、山下先生のお別れ会で漫才をした。②公演で遊んで友達になった。③なんとなく友達になった。答えは 1 です。2 年生の山下先生のお別れ会で、ピコ太郎の PPAP、ペンパイナッポーアッポーペンをしました。5 年生でまた一緒のクラスになって嬉しかったです。最近、2 人と遊んでいます。2 人とは家が近いし、遊んでいると安心できます。楽しいです。僕の話を乗っかって聞いてくれます。嫌な話も聞いてくれます。女子に近づくと、キャーキャー言われるとか、苦手な人の話とか、物を取られそうになって

嫌だったとか、悲しいことも分かち合ってくれます。ゲームの話や未来の話もします。僕たちが大人になったら、車も空を飛ぶかもしれません。ロボットが増えてきて、もっと便利になると思います。例えば、町全体をロボットが掃除して、街がピカピカになるといいと思います。みんなが楽しい気持ちになるように、風船を飛ばしたり、勉強を教えてくれたり、頑張れと励ましてくれる友達のようなロボットがいるといいです。僕たちの未来はどうなるかな。僕たちはどんなことをするかな。と気になります。未来に向けて頑張って勉強をします。

純が一生懸命作文を書くようになっていた時期で、可愛いなと思って私はこれを載せて読み合ったら、「クイズになってて掴みはオッケーって感じだね」とか、「すぐばれる設問が純らしいよね」とか。武とマルちゃんとは、本当に仲良しで、「一緒のクラスになってよかったね」とか、「未来について考えてるのがすごいと思った」とか、「自己紹介川柳も頑張ってたからやる気いっぱいなんだと思います」とかあったかい感じの感想が交流されて、少しずつほぐれていきました。こういう作文を読み合うようなこともでき始めて、言葉を差し出し始めてる気がしました。やっとカプセルから出てきて姿を見せてくれるような気がして手応えがある感じでした。

○「悪口はやめてください」と言う克

ところが感想交流が終わりかけた時に克が手を挙げて、「苦手な人の話ってどんな話ですか。苦手な人を教えてください」って言ったんですね。は？ってなって、本当に教室が息をのむというか、え？ってなってですね。克の腰巾着の遼が、「仲のいい人に苦手な人の話をするのは悪口なんじゃないですか」とか言って。私が「質問に答えたくない場合は、答えたくありませんって言っていいんだよ」って言ったので、純が「答えたくありません」って言いました。そうするとね、この時はまだクラスの中から「なんでも質問していいって先生が言ったよね」みたいなことがぶつぶつぶつと起こってきて。「なんでもいいって言ったけど、質問に全部答えろとは言ってないよ」とか、「でも悪口はいけない」みたいなことをぶつぶつという。

ここは私が押し切っちゃうんですけど、「よく読んでみて。悪口を言って楽しかったって書いてないよ。乗っかって聞いてくれる武とマルちゃんって書いてあるでしょ。否定しないで聞いてくれるから、悲しみが分かち合えて、未来に繋がるんじゃない。純がこの作文で何を言いたかったのか、もう一度読む必要があるんじゃない。先生はそう思うよ」と、ぐっと押したんですね。

そういうことを言うと、武が立って、これもちょっとすごすごかったんですけど、「純くんは悪口なんか言ってません。女子が逃げたり、純は普通にしてるのに突然怒り出す人がいたり、物を取ろうとする人がいて、純は困ってるんです。だから、困ってることの相談です」っておろおろと一生懸命話して。この武が、こうやって純のことをかばった、純がかばわれたっていうのは初めてで。武よくやった、って感じだったんだけど。

でも、克が周りを見ながら「困る？　何困ってるん？」みたいにすると、遼がヘラヘラって笑い、なんだか、武が一生懸命言ったことを受け止めて、深まろうとしてた子供たちが、深まれない。なかなか難しいなって。私が押す、武が言う。でも克はヘラっと支配

する。そうすると、そこで沈んじゃうっていう感じだったんですけど、さっきの輝がね、変な言い方になるけど、 本当に空気読めないんです。この輝が良くてね。「えー、でもさ、悪口って言うよな」とか言って、みんなが何言ってんねんこの緊迫したところでそんなこと言うな、って感じなんだけど、 女の子の何人かが必死になって、「いや、だからさ、悪口じゃなくて困ってる相談って武言ったやん」。だけど輝が、「いやー悪口って言うよな」って空気読まないで言うのね。で、純がもう涙目で、「だから僕は悪口言ってません」って言って、何人かが、「純の話ちゃうで」「純の話ちゃうやんな」とか言うんだけど、そういうおろろっとした感じで私をこう見るので、私は、「先生は悪口大臣です。苦手な人もたくさんいて、許せない人もいるから、お風呂の中で悪口を叫んでいます」って。

私本当に一番のストレス発散は、スポーツクラブで泳ぎながら、アホアホアホアホって言うストレス発散で、悪口をたくさん言いながら泳いでて、プールも可哀そうやと思いますけど。「じゃあとっておきの悪口聞かせてやるから、よう聞きや」って言って、「おのれら、よう聞きさらせ！　舐めとったらえらい目合うど！　お前、耳の中から手すーって突っ込んで奥歯ガタガタ言わせたろか！　それとも、その悪いド頭こんこんって上から殴って、胴体にめり込ませて、へその穴から世間さま覗かせたろか！　怒ってるから、触ったら熱いでえ、やけどすんで！　お前の母ちゃん出べそ！　ついでにお前も出べそ！　出べそ噛み切ってくたばれ！」って言ってやったの。それで佇まいを正して、嫌なことたくさんあるからねってね。もうこういう悪口をいっぺんいったらすっきりするねって言って。

子どもたちは、あの人何してはんねやろ、はー…、って感じだったんだけど、何人かが笑って。「先生こてこての大阪弁や。でも先生がそんなこと言ったらダメですよ。とげとげ言葉を使ったらダメだって道徳で習いました」って言うから、「アホかいな、大阪の伝統的悪口練習するのも大切な地域文化の伝承教育や。伝統の尊重は教育の重要課題になってまんがな。腹立ったら怒ったらええねん。抑え込まれて辛抱して私が悪うございましたなんてまっぴらごめんやし、先生はこれからも怒るし、悪口言いまくるで。燃える女や」とか言って、もうやけくそやからね。克に支配されてるから。負けるか、と思って、真っ赤に燃える〜とか言って、燃える女や！とか言ったら、もうみんなが、「あかん、あの人もうおかしくなってる。かわいそう」って。でも、別に克とは対立してないでしょ。悪口を教えてるからね。

輝はね、すごい喜んで。輝ちゃんってね、可愛い人なんです。「先生、めっちゃ面白い。ウケる。俺もやりたいから教えて〜」っていうから、「わかりました。じゃあまずね、あんたらね、目が弱い。ガンを飛ばすってわかるか。こうやってすんねん。あいつをやっつけたろうと思ったらこう睨まなあかん」みたいな話をしてね。で、じゃあガン飛ばし合戦をやろうとか言って、みんなで、飛びましたかとか言ったら、飛ばれへん〜、とか言ってやったんですね。

でもこれは、なかなか難しくて、関係を作っていくっていうことができない子どもたちだから、あの人を、睨んでるとか、あの人に言ってるんだっていうような練習がいるってことが分かって、ガン飛ばし、悪口ごっこっていうのが学級で流行ったんです。そんなこと言ったら怒られるけど。でも本当に流行ったんです。で、いろんな悪口が開発され

て、谷川俊太郎さんの悪口とか、いろんな悪口詩っていうのがあるから、そんなんを紹介して、大いに盛り上がって。まあそれは後の話なんだけど。

その時は純が来て、「僕の作文に嫌なこと言う人がいてへこみました」って肩を落として言うの。私が「いい作品は人の心を揺さぶるから議論になるんだよ。学級の傑作やね。武かっこよかったね」って言って、一生懸命私は応援しました。だけど純は、「先生は何があっても楽天的だから羨ましいです。僕は先生みたいにはなれません」、「そっか」みたいな話をして。

克のところに行って、「克さ、悪口言わないの。克、悪口面白くなかった？　教えてあげようか」と言ったら「結構です。」って。あの子なんなんやろって思いました。本当にこの時ぐらいまで私、克のことが大嫌いで、なんやねんあいつって思ってました。教師としては言ってはいけないことかもしれませんが、どうしても許せないっていうか、私が一生懸命やることに対して刃向かってくるっていうか。克っていうのはお内裏様のような顔をしてて、友達に対しても私に対しても、「差別しないでください。ルールを守ってください」って言ってて、手を組んでっていう感じなのね。お父さんは、やられたらやり返すっていう人で、お母さんは、家族のために生きてるような方なんですね。私はもう克の家庭も嫌いって言ったら怒られるんやけど、なんかもうわからんわ、もう本当嫌やわとか思ってて、職員室の中で、ほんまもうやってられへんわ、信じられへん、とか毎日言ってたんです。でもそれ言ってもしょうがないしなって思いながら、どういうふうにしたらいいのかなって、悩みに悩みました。大嫌いな克を私の中に位置づけるのにどうしたらいいかっていうことを、すごく悩みました。そうは言ってもな、と思えるようになったのは、私の中の失敗体験がたくさんあって、あのこともうまくいかんかった、このこともうまくいかへんかったみたいな、それで、ごめんね、ごめんねって思いながら、いろんな子が私の中に住んでいてね。「お前はまだそんなことやってんのか」「あの時の俺はこんな風に思ってたんやで」みたいなことを、私が勝手に心の中に住まわしてる子たちがいて、その子たちと一緒に対話しながら、克を分かっていかなきゃいけないと始めた 6 月でした。

7.　克のルール

学級会は全然やってなかったんです。4 月も 5 月も。学級会やったって、結局克の言う通りになるだけだから全然やらなかったんだけど、お誕生日会みたいなことをやってて、どの子も大事にしましょうみたいな。ようやく 6 月になって、いろんな学級のイベントを調整するのに学級会やらなあかんっていう話になって、学級会を初めてやりました。学級会、一番最初に何やるって言ったら、学級の目標みたいなことを決めなあかんのちゃうか、みたいな話になって、目指す学級像の話をしました。その時、ルールが守れる学級って克は言ったわけです。誰のルールやねん、またお前に都合のいいルールやろとか思ったんですが、ルールを守ってくださいがあの子の定番だから。そういうことを連発してました。例えば国語でグループ学習をしてる時に、純に向かって突然、「汚い！」って言うんですね。大きな声じゃないんだけど、あの子のすごい才能っていうか、みんながしんとした時に言うと、ヒィって感じになる。「人の嫌がることをしてはいけないのがルールですよね。今、鼻をほじって手を舐めましたよね。純くんやめてください」で、純が「ごめんなさい。」って言って。「アレルギー性鼻炎で顔全体が痒くなるから、気持ち悪いと言わな

いでほしい」とかモゴモゴ言うんですね。でもそれで手を緩める克じゃない。「鼻くそ飛ばす必要はないですよね」とか言う。それに同調する子が出る。「鼻をかむのは僕だけじゃないよ」って言って純が泣き出す。そうすると克は、「すぐ泣いて僕を悪者にするのはやめてください、卑怯です、アレルギーでもちゃんとしてる人はいます。だらしなくて不潔だから言ってるんです」と言う。で、もうどうしようもないから、私が体を入れて克の視線から守って、「克、気持ちが悪かったのはわかった。だけど、汚いなんて突然言うのはひどい。純に失礼だよ。泣いて当然でしょ。泣くことまで責めるってやりすぎだと思うよ」っていう風に言うんだけど、克は、「僕が我慢すればいいってことですか？　先生なんだからルール守らしてください」って私を睨む。今一緒にいる純が傷つくよりルールが大切だと本当に思ってるんかなと克の顔を眺めてしまうんだけど、私は。なかなかそれで解決するような問題じゃない。汚いは言いすぎかもっていうつぶやきは起こるんだけど、なかなかうまくいかない。純が気になって、話をしたいと思うんだけど、兵庫県の 5 年生は、教科担任制っていうのがあって、授業に行かなきゃいけなかったりして話ができなくて、給食の前に話したんだけど純が、「僕の運命は暗黒です」とか言って、話にならないですね。で、掃除の時間、純に、「あのさ純さ」って言ったら、克が寄ってきて、「今は黙掃の時間です。私語はやめてください。」って言うから、「あなたにとって大切なのは、泣いてる純より黙掃なのか。純を傷つけた自分の言葉に責任を感じないのか」っていう風に迫りたくなるんだけど、ここでルールがどうとか、そこが問題じゃないからもういいやって思って、ぐぐっと堪えた。

スタンダード訓練の中で、この子たちは 2 年と 3 年の間ぎゅうぎゅう締め付けられましたから。学校って何をしてるんだ、今を生きるのに都合のよい人間関係を訓練したのは、私たち教師や学校ではないのか。しかも 4 年生で荒れたのはルールを守れなかった子どもたちの責任だって言って、子どもと保護者を連日校長室に呼んだんですね。だから克を単純に責めたってお前も一緒かみたいな話になるから、それはしてはならんと踏みとどまりました。「純君がこっちを見て笑ってきたから、僕は傷つきましたから怒ってください。純の傷つきだけ先生はフォローするんですか」みたいなこと言うから、「そうなん」って言ったら、「いや、にこってしたけど、ごめんねっていう意味で笑ってないです」とか言うのね。つまり笑われたので傷つきました、って言うんですよね。「でもさ、今、純の話聞いてるから後でいい？」って言ったら、「純君の話が先で僕が後ですか」って睨んでくるんです。あかんと思いました。なぜなら、彼のお父さんからこんな手紙をもらっていたからです。「4 年生の時、授業妨害や他のお子さんへのいじめの問題で度々学校から連絡をいただきました。悪いことは悪いと厳しく指導してくださって結構ですが、家で子どもによく聞いてみると、毎回学校の説明と齟齬があります。　学校から謝罪を受けたこともあります。我が家の教育方針はやったらやり返すです。誰が一番悪いのか、問題点をはっきりさせ、納得できる指導をお願いします。間違いのない指導であれば体罰でも文句は言いません」。あー失敗したな。純に話すんやったら、克のいないところで話すべきやったなって。克の苛立ちは、私が克を悪者、克が純を攻撃してるっていうふうな見立てでやってるから納得できないのかな、と。

「ごめんね」って言って、克の話も聞くよって言ったんだけど、克はもう黙ってる。廊下の隅に行って、「なんで純そんな気になるん」って言ったら、「話を逸らさないでくだ

さい」って言うから、「いや、純が汚いって言ったのは君だからさ。学級のほとんどの人は先生と黒板の方向いてるから気づかなかったけどさ。さっきも純に笑われたって感じたんだよね。いつも純ばっかり見てる気がするんだけど」っていう話をするんだけど、「僕は傷つきました。差別しないでください」っていうことをずっと言う。顔付きが必死なんですね。

全然違うんだけど、何年も前に、俺なんか死ねばいいんやろって掃除ロッカーの上に飛び乗って叫んだギャオスくんっていうのがいて、ギャオスも、「お前らみんな死ね、俺が死ねばいいんやろ」としか言えなかったんだけど。それも辛かったんですけど、ギャオスが叫んでたことと、克の必死の顔。それはやっぱり、私の実践の中の弱さかもしれないっていうか…。私、ギャオスがね、ロッカーの上から叫ぶからね、ロッカーの上から教室見たらどんな気がするんやろって言って、教室のロッカーの上にこうやって乗ってたら、子供たちがみんな教室のロッカーの上に乗って、「先生この隅っこ感がええんちゃうか」とか、「ギャオスくんは怒鳴りながらも俺を見てくれって言ってるんちゃうか」とか言って、教室がほぐれるっていうような実践があったんです。ギャオスは本当に何を言いたかったんだろうっていうのはいまだによくわかってなくて、私は今でもギャオスに、あんたあの時何言いたかったんかなって思う時がふっとあるんだけど、そのギャオスと克が重なってくるっていうか、ギャオスが克を慈しんでるっていうか、そういう風に思い始めると、教師としての私を問い直すことがどうしても必要になってきた。

8. 教師としての私を問い直す

私は克をいじめの中心だと思ってて、純を克から守ってやらなければいけない。学級を立て直して、再生させたっていうふうにみんなに思わせるっていう自己承認欲求を持っている。石本先生が担任で嬉しいです、と言われて、教員評価は低いけど、みんな見てみい、みたいなことが確かにある。教員評価が低いのは制度がおかしいからで、教師としての私の価値は子どもと父母が知ってるっていう風に思いたい。克を本当に理解しようとはせず、新自由主義の申し子のように見立てて彼を良い方向に導き、私の指導力を示したいと思ってる。克が嫌いっていうのは、私もそういうところがあるんじゃないかっていう風にもう1回考えていて、だんだん教室がほぐれてくるからあとは克をなんとかするだけっていう風に思ってるんじゃないか。私の指導に入ってこない克を数で包囲して改心させるような指導をしてるんじゃないかっていう風に思いました。私の中に住んでるギャオスが、「お前な、今度こそ覚悟決めろよ」みたいに言ってるような気もしました。克はいじめてるように見えるんだけど、もっと大きなものにいじめられてるかもしれない。克を私の指導の成功エピソードに組み込んで手懐けてしまうのは、違うかもしれない。自分自身は教員評価にも組み込まれないで生きているっていう風に思ってるのに、克を私の成功のためのピースみたいにするのおかしいかもしれない。「僕は傷つきました。差別しないでください」っていうのは、私にはすごく嫌な言葉なんだけど、克はそう言うてるやんって。 純の言葉が聞けるのに、どうして克の、「僕は傷つきました。差別しなしないでください」が憎たらしく感じるんやろうって思って、本当に深呼吸して、差別されてると感じると辛いよね、ごめんねって言ったんです。今までは克から純を守って、あとは克をこっちにって思ってたんだけど、それではどうもいかんと思いました。

9.　克の家族

克の家族っていうのはすごいお家なんです。社会的地位が高く裕福で、地域の名士。お母ちゃんは、すいませんとしか言わない人で、家庭訪問とか個人懇談は夫婦で来て、お父さんが喋りまくるんですね。家庭訪問では、「先生なめてかからないでくださいね」って。「3 年の時は厳しい先生だから不登校もいたかもしれないけど、教室は落ち着いててうちの子は 3 年生の先生が大好きでした。先生が甘すぎだから、殴ってでも言うこと聞かせてください」、って言われたんです。お父さんが私を甘いって言ったのは理由があって、私が連絡帳に「給食エプロンを使った後、丁寧に畳んでいます。見事」って書いたんですね。克のいいとこってそこしかなかったから、そうやって書いたんですね。そしたら、家でも洗濯物をたたんでもらいますって返事が来たんです。お母さんからね。お母さんとやりとりできたから嬉しくて、克に「洗濯物たたんだ？」って言ったら、お父さんが「そんなことは女の仕事やからしなくていい」って言ったって言うからますます嫌いになって、くそっ、克と克のお父さん大嫌いとか思ってたんです。「女の仕事」やって、「殴ってでも言うこと聞かせろ」って、あームカつくムカつく、と。

克はバスケットが得意で八村類みたいになりたくて、バスケットチームに通ってて、お母さんが校門のところまで車で迎えに来るんですね。大変ですねって言ったら、いえ、母親の仕事ですからって言って、会話にならない。で、本当にささいなきっかけなんだけど、「お母さん、克の T シャツ可愛いね、お母さんが選んでんの？」って言ったら、「可愛すぎますか」って言って。お母さんが、実は男の子 2 人やねんけど女の子が欲しかったとか、お父さんは 2 人の男の子を男らしく立派に育てたいと思ってて、子どもがグズグズ言うと手が出るとか、お母さんは結婚してもらったから家事をできるできるだけ頑張って、食事は栄養のある美味しいものを心がけてるみたいな話をしてくれて。「でも T シャツっていうのは私が選べるから可愛いのにしてる。女の子だったら一緒にお買い物行ったり料理作ったりできるのに男の子だからドライバー役ばっかりで、でも克の応援楽しいんです。選抜メンバーに選ばれたらお祝いしようと思ってます」っていうような話を初めてしてくれはって。本当お母さんの T シャツのセンス好きやわって。そこから ポツポツ迎えに来てくれるお母さんといろんな話ができるようになった。本当は働きたいんだけど、お父さんが働く必要ないっていうこととか、子どもを叩くのやめてほしいとか、お兄ちゃんは中学生になったので、1 人前に扱ってやってほしいとか言うから、アドレスを交換して、色々聞かせてねって言っていました。

10.　克の傍らに寄る

克はテストの点は悪くないんです。でも作文は書けない。相変わらず純、下敷き引いてないとか、手いじりするなとか注意する。私は、人のことはいいから、って言う。すると克が「ほっておけませんでした。先生が言わないから言いました」って言う。学級が沈み込む。わーって言葉が出てええ感じ、と思ったら克が、「純、下敷き引いてない」とか言うから私は本当に克が憎たらしかったんだけど、よう考えたら、わーって楽しくなる瞬間に言葉発するってことは、わーって楽しくなるっていうことはわかってるんちゃうかっ

ていうか、もう絶妙のタイミングやから、 なんであの子はそこで言うんやろって。ひょっとしたらあの子は楽しくなるっていう感覚が怖いんじゃないかみたいなことをちょっと考えてみたりしました。教室がわーって楽しくなってくる段階で克がなんか言うぞ、っていうのはだんだん私にもわかってくるから、わーって楽しくなってなんか言うかもしれへんなと思ったら、克のとこ行って、私が克を支えるっていうか、そんなこと言わんでもええけどねっていうような、立ち位置を変えたっていうか。今までは克の視線から純を守ってたんだけど、そうじゃなくて、克のところに行って心配してた方がいいねっていう風に思いました。

11. １学期の懇談で克の父は自分の話ばかり

1 学期の懇談会にも、お父さんとお母さんが揃って来て、お父さんが「勉強はどうですか」と言うので、「頑張ってます」と。またお父さんが「授業の態度はどうですか」って言うから、「真面目すぎるほど真面目です。私が気がつかないところまで注意してくれています」なんて言ったら、お父さんが、そんなこと言われたの初めてですって言って。4 年生ではとにかくボロクソ言われてますから。家ではいい子やねんけど学校とは合わないと思ってたって言って。「学校に合わないと思ってたんですけどね、石本先生が持ってくれてそう言われて嬉しいです」とか言って、お兄ちゃんの話を今度はしだして、へーって、そうなん、そうなんって言いました。でもお父さんにしたら、男らしく育てるつもりで積極的に子育てに関わってきたのに、お父さんの理想の家庭像が揺らぎ始めて、なんだか不安なのかなっていう気がしました。で、お父さんが、克のバスケットも壁にぶつかってるって言って、ゲームを作るのが上手で切り込んでシュートするんだけど、シュート率が悪いっていうようなことを言いました。お母さんに、毎日送り迎え大変でしょって言ったら、克は精一杯頑張ってるんですって。練習から帰る車の中で熟睡してて、家に着いて起こすのがかわいそうで、それでもお父さんとランニングしてるから応援してますって、言ったんですね。今までは長男と 3 人でランニングしてたんですが、長男はもう来ませんわっていう風なことをお父さんが言う。お父さんは仕事の後にランニングをして子どもと一緒にご飯を食べて晩酌するのが楽しみで、その話をずっとする。お母さんはランニングから帰ってくるタイミングで夕食を整え、晩酌に準備をして後片付けをしている。だけど、お父さんは克の疲れもお母さんの仕事も見えてない。私は思い悩んでお母さんに、見えてないお父さんにどう向き合ってもらうか作戦がいるねっていう風に言ったんだけど、お母さんは、「先生、ありがとうございます。でも、あの人は本当に子ども思いで、家庭思いなんです」って言われたりして。そうなると克の背中は、子ども思い、家庭思いの父と、違和感はあるにせよ、理想の家庭を目指す母を背負ってるんやなって。もうお兄ちゃんはそこから降りることができたんだけどあの子は次男で、その中で必死になって頑張ってるっていうか。そう思うとあの子の冷たさ、あの子の必死さ、楽しくなる感覚を受け入れてしまったら自分がもう保てなくなるんじゃないかと思ってるそのカッチコチの体を、嫌い嫌いって言ってるだけではあかんなって。なんて切ない…なんて一生懸命生きているんだみたいなことがちょっとわかりかけて、克の背中を撫でてやりたくなりながら克の後ろに立ち続けたっていう感じでした。二学期は色々あって、自然学校、運動会の組み組体操、音楽会…。克が真面目にリズム刻むからみんながみんなの音に乗れないとか、注文の

多い料理店をやったりとか。色々あったんですけど、克と私が少し違う関係を結びながら二学期が終わって。

12. 「バスケットうまくなりたい　オリオン座」

3 学期は俳句に取り組んで、「バスケットうまくなりたいオリオン座」。ピンと張った感じがあっていいとかみんなが言って、誰やろって言ったら克でした。あの陰険な克が、オリオン座？みたいな。どっちかっていうと、「バスケット上手くなりたい歯噛みする」、とか、「バスケットミスするやつをしめ上げる」とか、そういうイメージだなという感じだったのに。克はお父さんにシュート下手すぎるって言われるって悩んでた時期で、私が、本当にあてずっぽうだったんですけど、「あんた頑張りすぎなんちゃうん。脱力や」って。こう、ホってしたらっていいんちゃうん、ガンってしたら返ってくるんちゃうんって、まあいい加減なことを言ってたんです。これは、組体操とか合奏で、克は真面目にリズム刻むんやけど、みんながのってる時に克だけのれてないリズムを真面目に刻むから、そしてこの時期になるとみんなも言えるようになってたから、「いやちゃうやん」みたいなことを散々みんなに言われてた時期でもあって。それで、私がそうやって言ったら、漫画みたいなんですけど、急にシュートが上手になったんです。神様は見ててくれるね（笑）。克のお父さんがね、「石本先生、お見それしました。先生バスケットのシュートのアドバイスも上手なんですね」とか言うから、いやそんなんしてないけど、と。で、その脱力の感覚っていうのはやっぱり、子どもたちと関われるようになって、学級の中の多様さを楽しめるようになって、少しムフフと笑えるようになって、この頃になると克もムフフって笑って。結衣っていう子が、克の笑い方って可愛いとか言って、ちょっと笑えるようになった。

３学期の初め 5 年生のバスケット交流会っていうのがあって、隣の瓦林小学校とやりました。ここは体育学校かと思うほど、2 学期は 20 分休み全部縄跳びをやらしてるみたいな学校で、自由にさせてやったらいいのにとか思うんですけど、でもめちゃめちゃバスケットとかがうまくて、今まで 100 対 0 とかで負けてたんです。私あんまり好きじゃないんですけど、今年は、克がいるし、サッカーがすごく得意な子とか、女の子でサッカーチームに属してるみたいな子が何人かいる学年で、今年はいけるんちゃうかというようなことを思って、盛り上げるために、「いや、いつもは 100 点で負けてるけどな、今年はひょっとしてひょっとして、ひょっとしたら勝てるんちゃうか」とか、口から出任せを言ってたら、それを聞きつけて勝負事が好きな克のお父さんが私に、「先生、プロの選手が住んでるんです。コーチに来てもらいましょう」って言うから、お金もないしそんなんええって言ったんですけど、プロの選手の方が母校だっていうことで、朝の練習に来てくれはったんです。学校に文句ばっかり言ってたお父さんがそうやって言ってくれはった。朝、私も行くんやけど、克のお父さんっていうのは真面目な人だからね、学校に来て、先生、頑張りましょうって言うの。朝一から頑張りたくないと思うんだけど、頑張りましょうって言うから、はいって言って。お父さんと、一緒に取り組めて嬉しい、ちょっとめんどくさいけど、と思いながらやったわけです。そのプロ選手がすごくって、もちろんパソコンでプロの選手のフォーム見るのも大事だと思うんですけど、もうね、違うの。体育館の中にすっと立ったら佇まいが違うっていう感じで、小学校の体育館の一番端くらいからすっと投

げて、足の筋肉から見事なの。それははあーって思って、みんなの目がハートになって、その選手の方が、「あのね、バスケットっていうのはね、ボールをうまく繋いで、最後シュートするっていうゲームなんだよ。だからボールを繋がなきゃいけないんだよ。だから、体全部を使って楽しんで練習して、お友達のことが好きにならないとバスケットでは勝てないんだよ」みたいなことをまた言うてくれはったんです。これはと思って、聞いた？　克、聞いたかって、そんなはっきり言わへんけど、聞いたかみたいな話になって。やっぱりこの頃は、随分克が変わってきてるんだけど、それでも純はできひんから、ボールがこうきて手出せよと思ったけど顔出すねん。どうして、みたいな感じなんですけど、そうすると純を見てこう舌打ちするわけで。克はこの頃になるとそんなに純を責めてないんだけど、やっぱり歴史があるから、そうなるとみんなヒィってなるんだけど、オリオン座の時に「お父さんと夜ランニングしていて夜空を見上げると星が光っていて、季語を調べるとオリオン座だとわかりました。お父さんが瓦木小学校に勝てるといいなって言いました。僕は勝ちたいです」みたいなことを言っていて。同じ舌打ちなんやけど、舌打ちするのも勝ちたい気持ちなのかな、克はやっぱり勝ちたいって必死になってるのかと思うとちょっと許せるっていうか、純もちょっと怖くはなくなるっていうか、僕のことが嫌いじゃなくて、勝ちたいと思ってるんだって、僕を責めてるんじゃないみたいに思う。純がね、この句を読むと、みんなで練習してうまくなりたい克くんの気持ちが伝わってきますって。克はまたそこでイラッとくるねんけど、そういう風なことがあって、丁寧にボールを繋ぐ人になったんです。

「バスケット上手くなりたいオリオン座」っていうのは私たちの名句になって、100 点を取ったりすると子どもたちが、オリオン座？とか、嬉しいことがあったら、オリオン座？とか言って、なんでもかんでもオリオン座とか言って、克の言葉がみんなの嬉しさになっていくっていうことは、克にとっても 初めてだったし、私たちにとっても初めてだし、克の人を排していた感覚が子どもたちの繋がりの中で違うものになったのはとても嬉しいことでした。

インフルエンザが大流行して（コロナのちょっと前です)、相手チームのエースが何人か休んでて、それで勝ったんです。相手チームボロボロで、瓦林小の校長は「もうやめましょうか」って瓦木の先生に言ったんですけど、瓦木の校長も意地があったから、「いや、今年はやりましょうか」なんて言って、やったら勝ったんです。負けてたとしても、悔しいなっていう風にも言えただろうと思うんだけど、克のお父さんが、こんなボード持って応援してたんだけど、ボードをバーンって割って、勝ったー！勝ったー！ってやって、私たちはキャーって喜んで、めでたいことでした。

2 学期末の懇談会でね、もちろん克のお父さん来てますから、プロ選手を紹介してくださった克のお父さんのおかげですねっていう風に言ってくださる人がいて。4 年生の時娘が家で荒れて心配したけどこんな楽しい 5 年生が過ごせて、って言って、そのお父さんはテレビ局のプロデューサー、ちょっとかっこいいお父さんなんですが、そのお父さんが泣きはって、みんなでおいおい泣いてね。先生、うちの子今になって 4 年生の時怖かったことを言うんですけど、よく頑張ったなって思いますって言って。純のお母さんも、純が学校に行くのが辛かったんだけど、認めたいですって言って。あんなに憎たらしかった克が大好きになって、私たちの中に位置づいて、保護者会の中でも位置づいて、終わった。三

学期も楽しく笑い合って過ごして春休みに打ち上げしましょうねってみんなで言ってたんだけど、5年生で2月末に一斉休校になりましたから…。ちょうどラグビーが流行ってて、ラグビーのハカで6年生を送って、次は私たち僕たちが6年生なんだとかいうのをやろうって言ってて、結衣が、先生一言も口出さんといて、私らが全部やるから、って言って。体育館でもう先生出てって言って、私たちで6年生を送る会をやろうとか言ってガーって盛り上げとったら、安倍さんの一言でパーですわ。それで終わっちゃったんだけど。

決して私が優れた教師だとかそういうことじゃなくて、やっぱり人間っていうのは、いろんな関わりの中で変われるもんなんだって思います。変わってるんじゃなくて、私が変わり、克が変わり、克が変わったことでまた私が変わるっていうか、そういう関係性の中を生きてるんやな、みたいなことを思いました。

13. 「子どもを寿ぐ」とはどういうことか

子どもを寿ぐっていうのは私的に言うとどういうことかって思うと、価値において無限っていうことを、今とか今日とかいうのを徹底的に大切にしてやるっていうか、それをみんなでどういうことなのかなって考えていくっていうこと。明日のために努力するんじゃなくて、今笑うとか、今手を握るとか、今歌うっていうことをもっと大切にしなきゃいけないんじゃないかなっていう風に思います。二つ目は、広島の原爆の中心で子どもを抱きとめながら黒焦げになっていた教師たちというのを時々ふっと思い出すんですけど、阪神淡路大震災で、ゆりの台で地滑りが起こるんですけど、その土に埋まったのを掘り返していくと、お母さんが子どもに被さって自分より1秒でも長く子どもを生かそうとしているような遺体とか、そういうことを色々思うと、大丈夫って、1分1秒でも、大丈夫って、言ってやれる大人になりたいという風なことを思います。子どもの声を徹底的に聞くとか、私はしょっちゅう無力感や孤立感を思うんですけど、それは私だけのものじゃないっていうか。子どもたちと私は全然年齢が違うし、文化も違うんだけど、一緒に生きてることを大切にしながら挑戦していくっていうか。明日の努力がおかしいって言いながらそれはおかしいんちゃうかって思うかもしれないけど、そうじゃなくて、今を充実させようっていう風に一緒に考えていく、ということを思っています。何より、小学校の教師としては子どもたちが「やっぱりおもろかったなあの時」って思うようなことを作ってやりたい。阪神大震災のときの学校でのこともあったけど、そういう、あ一面白かったなとか、人間って捨てたもんじゃないよなとか、それは、子どもたちも思うし、私も思うっていうことを大事にしたいと思う。

それから、直感的な実践っていうのを大切にするっていうか、子どもの悪口を言ってはいけませんとか、そういうことじゃなくて、今日はあの子が許せないと思うことは、それは今日なんだから今日でいいんだけど、その中をくぐりながら新しくなった自分を受けとめて記録したり、みんなに聞いてもらったりすること、というようなことを思いました。私も寿がれること、ってやっぱ書いとかなあかんと思って書きました。一番最初の新任の時のアヤちゃんの手の温もりじゃないけど、やっぱり「皆さん」って言われるようなことでは人間は癒されなくて、言葉を聞き取ってもらって、あなたの言葉をしっかり受けとめたよっていう風に私が言い、そのことをありがとうって子どもが言う、そのことで、

生きるということを肯定していくっていうことが大事なんじゃないかと思っていて、寿ぐという言葉を使おうと思いました。
　価値において無限とはデューイのどこから取ったのかとか、そういうことは言わないでください。あんまり勉強してませんから。でも、そんな風に思っています。
（拍手）

質疑応答　概要

　①実践記録とサークルについて、②働き方改革と子どもも教師も寿がれるということについて、③教師の子どもの見方の変容について、④学校にいかなければならないか、就学を１年延期するなど柔軟な就学についてもっと検討されるべきではないか等、活発な交流が行われた。

（川地）　充実した議論で、まだまだ続けたいところなんですが、もうすでに定刻を 30 分過ぎてしまいました。今日は石本先生、ものすごく充実した、先生の人生と教育実践と、本当にありがとうございました。そして座談会をやれという要望がありましたので、是非それを実現させたいと思います。その際は皆さんにもご連絡したく思います。最後に石本先生に拍手をお送りして閉会といたします。ありがとうございました。

以上

主催　日本教育学会近畿地区　（担当理事：川地亜弥子・渡部昭男）

研究集会のご案内

私の教師生活――子どもを寿（ことほ）ぐ教育を――

日本教育学会近畿地区では、2006 年以来、「戦後教育実践に学ぶ」「私の教師生活」等の研究会を開催し、戦後教育実践について実践者の報告に基づき議論を深めて参りました。下記の通り研究集会を開催します。ふるってご参加下さい。

日　時：　2023 年５月２７日（土）１４：００－１６：５０（予定）

講演者：　石本 日和子 氏

相愛大学講師。元兵庫県小学校教諭。教育科学研究会副委員長等。単著に「被災体験の自己理解と教師の支援―阪神淡路大震災時小学生だった青年の『語り』からの考察―」（『臨床教育学研究』第 4 巻、2016 年）、共著に『道徳教育の批判と創造：社会転換期を拓く』（教育科学研究会道徳部会・藤田昌士・奥平康照編、エイデル研究所、2019 年）、『コロナ時代の教師の仕事』（教育科学研究会教室と授業を語る部会編、旬報社、2020 年）等。

会　場：　神戸大学大学院 人間発達環境学研究科　Ａ棟４階　Ａ４２７室

（神戸市バス 36 系統「神大（しんだい）人間発達環境学研究科前」下車、徒歩すぐ）
アクセス（「鶴甲第２キャンパス」を見て下さい）　キャンパス内マップ

申し込み・問い合わせ先：　神戸大学　川地亜弥子　seminar.kawaji(あ)tiger.kobe-u.ac.jp
※（あ）を@（半角アットマーク）に置き換えて送信して下さい。
※　当日参加も可能ですが、資料準備の都合上、お申し込み頂けると大変助かります。

私の教師生活７
印刷　２０２４年７月２０日
発行　２０２４年７月２８日

編　者　日本教育学会 2023 年度近畿地区研究集会　神戸企画担当
　　川地亜弥子・渡部昭男
印刷所　神戸大学生活協同組合

（非売品）